

兵庫大学短期大学部「研究集録」投稿規程

第1条 投稿できる者は、本学の専任教員及び兼任教育職員とする。

2 共同研究の場合は、前項に規定する者を主たる研究者とし、前項に規定する者以外を含むことができる。

第2条 投稿は、1人2編以内とする。

第3条 原稿は、「論文」、「ノート」、「美術関係の作品写真」及び「その他」とする。

2 原稿（「美術関係の作品写真」を除く）は学会誌等に未発表のものとする。

第4条 原稿（「美術関係の作品写真」を除く）は、1編について、図表及び写真を含めて400字詰原稿用紙で40枚（これに相当する字数）以内とする。欧文の場合は、6000語以内とする。

2 投稿の詳細については、投稿の手引きによる。

第5条 投稿者は、著作権のうち、「複製権」及び「公衆送信権」の行使を本学に委託するものとする。

第6条 原稿は、研究集録編集委員会において、その掲載の採否を決定する。

第7条 投稿期間は、毎年度、研究集録編集委員会が定める期間とする。

附 則

この規程は、昭和56年7月1日から施行する。

附 則

この規程は、昭和58年7月5日から施行する。

附 則

この規程は、昭和61年9月1日から施行する。

附 則

この規程は、昭和62年7月14日から施行する。

附 則

この規程は、平成3年7月2日から施行する。

附 則

この規程は、平成4年7月14日から施行する。

附 則

この規程は、平成5年7月20日から施行する。

附 則

この規程は、平成7年3月10日から施行する。

附 則

この規程は、平成8年2月13日から施行する。

附 則

この規程は、平成10年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

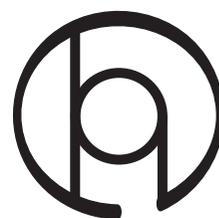
この規程は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成22年4月1日から施行する。

兵庫大学短期大学部研究集録

No,50



HYOGO University

平成28年 3 月

ISSN 1344-9397

目 次

論 文

スリランカの幼児教育の現状と考察 三井 圭子 1

子どもの発達と幼稚園・保育所における遊具の活用について
..... 宮川 和三・井上眞美子 11
徳田 泰伸

40人規模クラスにおける能動的な学習活動の実践報告 杉田 律子 17

実践報告

ボランティア活動を通じた学生の育成
「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」実践報告
..... 前田美智代・三井 圭子 27
黒崎 令子・金谷 公子
石川 恵美・井上 朋子

スリランカの幼児教育の現状と考察

The Present Condition and Consideration of Infant Education in Sri Lanka

三井圭子*

(平成28年1月20日受理)

要約

スリランカ・ハプタレー地区の幼稚園の訪問と保育交流が4回となった。スリランカの幼稚園の保育内容に視点を当て、改めて幼児教育を考えたい。日本は保育の新制度になり、認定こども園への移行が進んでいるが、様々な保育の方法、形態がある日本の幼児教育と考え合わせながら、スリランカの幼児教育の現状と考察をしていき、幼児教育の今日の在り方を考える。

キーワード：幼児教育、創意と工夫、保育の内容

keywords：infant education, creation and ingenuity, contents of the early childhood care and Education

1. はじめに

スリランカ・ハプタレー市立幼稚園への訪問を重ね、またコロombo市街の2つの幼稚園を訪問する機会も得て、幼児教育のあり方を改めて考えることとする。

日本の幼児教育は、130余年の歴史があり、幼稚園教育要領の改訂を重ねながら、教師主導型の幼児教育の反省から、幼児を主体とした幼児教育に変わっていく。

それは、教える教育ではなく、子どもの学びを支え、励まし、見守り、一人ひとりの子どもの能力を伸ばし、心情を大切に、その子なりの成長発達に添った幼児教育に進んでいく。

生きる力をつけ、自立に向かっての幼児教育である。また、心情、情感を大切にするため幼児教育は心の教育とまで言われるようになる。

幼稚園、保育園の両方の機能、役わりを備えた幼保連携型認定こども園という新制度が始まる。制度上のことであって、保育の内容は、幼稚園教育要領、保育所保育指針の内容を幼保連携型認定こども園教育・保育要領にそのまま移行している。

日本には様々な保育の方法、形態があり、園、地域、区市町村の考え、方針がある。

しかし、目の前の子どもたちが心身共に健康で、明るく活発に子どもらしく育つことを誰もが願い日々保育を進めているはずである。

「〔幼保連携型認定こども園〕とは、義務育及びその後の教育の基礎を培うものとしての満3歳以上の子どもに対する教育並びに保育を必要とする子どもに対する保育を一体的に行い、これらの子どもに健やかな成長が図られるよう適当な環境を与えて、その心身の発達を助長するとともに、保護者に対する子育ての支援を行なうことを目的とし、この法律に定めるところにより設置される施設という。』¹⁾と就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律に、述べられている。また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領作成員でもある先生のお話も聴く機会があったが、これからは、満3歳以上の子どもには、しっかりと幼児教育をしていく時代である。と強く話されていた。幼保連携型こども園になる所などは、幼児教育を進めることがはっきりしている。

一体、幼児教育は、現実的にどうすることなのかという、戸惑いもみられ、教師主導型が復活する懸念も出てくる。

(*みついいいこ 保育科講師 幼児教育)

幼児教育は見えない部分があり、それを見える方法をしていくなれば、見せる保育、見える保育形態になってしまうのではないか。

ここで、保育の方法を論じるのではなく、発展途上国スリランカの幼児教育の現状を見ながら、もう一度、私なりに幼児教育の考察をしようと思う。

2. ハプタレー市立幼稚園

スリランカの幼稚園は、3歳児、4歳児の2年保育である。5歳児は小学校に進む。

4回のスリランカ訪問で、毎回スリランカ・ハプタレー市立幼稚園を訪問している。そこで、保育内容をじっくり見ることができたのは、2013年と2014年である。

保育者がどのような保育を進め、何を保育の指針としているか。一日のデイリーはどのようなものかを知る。

(1) 1日のデイリー（訪問日）

表1

時間	保育の活動
8:00	・登園 持ち物の整理 ・自由に遊ぶ
9:00	・朝の集会とリズム体操
9:30	・クラス毎の手遊び表現遊び
10:00	・制作をする 絵を描く、ちぎり絵で字を覚える他
11:30	・昼食の準備と昼食 ・自由に遊ぶ（戸外）
13:30	・降園準備をする
14:00	・降園する

概ね1日の流れはそう日本とは変わらないが、保育の中心は、すべて保育者の指示通りである。

朝のリズム体操は、基本的な生活習慣を身に付けるために、言葉を入れながら、動作をする。

英語も覚えるように、英語の歌を歌いながら身振り、手振りをしている。



写真1) 朝の集会



写真2) 集会での手遊び

身振りや、手振りなどは、どのように手を洗うか、顔を洗うか等生活習慣を身に付けるためのものであり、英語に慣れることになる。

(2) クラス活動

ハプタレー地区で、園庭も広く、遊具も豊富にあり、園舎もきれいに改築され、トイレも完備しているため、年々園児が増加している。

表2 2014年度の園児数

園児数	内 訳
20名	シンハラ人
35名	タミル人・ムスリム人

そのため、保育室を2つにしてある。

2011年訪問時は1つの保育室であったが、園児の増加で、トイレ側の小さなホールと元の保育室とを区切ってしまった。

教員はシンハラ人組・タミル人、ムスリム人組とそれぞれ1人ずつである。園長先生もいる。

そこで、クラスは、3歳児、4歳児の混合保育を実施している。

朝の全体の集会後は、クラスでの活動が始まる。

人数も多いし、保育室も狭い、タミル人ムスリム人の子どもたちは、ムスリム人の教員との保育を園庭でする。

シンハラ人の子どもはシンハラ人の教員と一緒に、広い方の保育室で、輪になりリズム遊びを楽しんでいる。

クラスのまとめ、意識付けるには、子どもがわかりやすく、一人ひとりの顔が見える円形になる。指で、数を数えたり、手拍子をしたりと、子どもたちは先生と一緒に遊び、数の数え方等を学んだり、教員研修での「ロンドンブリッジ」のイングリッシュソング等で子どもたちと楽しむ。



写真3) シンハラ人組 円形になって



写真4) タミル人、ムスリム人組 円形になって

シンハラ人の子どもの保育室では、机の前に座り、“お勉強”の時間が始まるのである。

ちぎり紙をし、あらかじめ鉛筆で書かれてあるシンハラ語の一字をなぞって、貼っていく。

3歳児、4歳児と同じ作業である。

ノリはスッチックのりであった。

しかし、紙を細かくちぎり、貼っていく作業は中々進みにくい。泣き出す子もいる。



写真5) ちぎり紙での文字の勉強

タミル人、ムスリム人の子どもの保育室では、一人1冊のノートで、字の練習と数量の勉強等もある。動物のか形等も同じ様に、種かビーズを貼り、材料を替えたり、色を付けながらの作品作りである。黒板にはそれぞれのクラスでシンハラ語と数字、タミル語と数字等書かれている。ノートに書き写しをして覚える。先生の机の上にはノートが重ねて置かれていて、書き直したり、検印されていた。



写真6) 花・蝶の形

このように見ていくと、文字、数量、大小、形の知育に力を入れている。保育室に展示し、保護者が見ると教育をしてもらっていると安心する。

それが保護者の願いでもある。

しかし、写真7)のように、子どもの自由に描いているところもある。2色の折り紙で、犬の顔、体を折っている。その犬の顔がそれぞれの子どもの思いの顔になっている。また、テントウムシの体に顔、手足も描いている。そんなところに少しホッとさせる部分がある。



写真7) 犬とテントウムシ



写真8) 円、三角等様々な形の組み合わせ

3. 教員のテキスト

指導の基となるテキストがある。州からの配布物である。

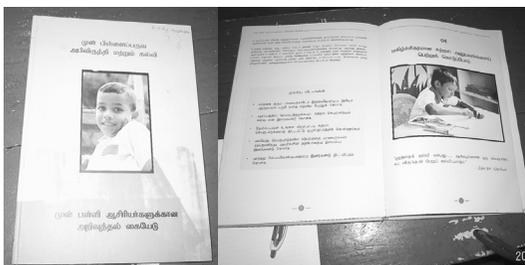


写真9) テキスト

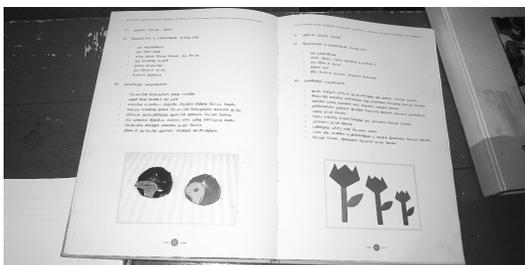


写真10) テキスト

内容はどのように、文字、数量、大小等を動物、草木花、虫で造形表現をしていくか、見本が描かれている。それが、マニュアルとしてそのまま利用する。しかし、そのまま利用するのではなく、教員の工夫と、子どもの想像と創造を大事にしてほしいと思う。

一日の生活の仕方、昼食の食事内容等も、写真入りで表示してある。また、配布物なのか、英語の表もある。

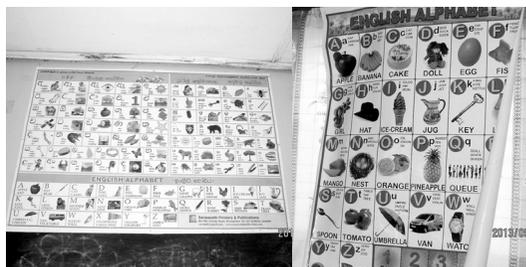


写真11) シンハラ語・英語のポスター

写真11) のように、Aは Apple Bは Balloon 等アルファベットのポスターである。また、シンハラ語、タミル語の表も掲示してあり、訪れた時は、保育室一面に子どもの作品と一緒に掲示物があった。

子どもには見て覚えるようにとの思いと、保護者へのアピールとなる。日本人が訪問する日は、保護者、近隣の人々も幼稚園に来て、行事の参加する。これも日本の幼稚園行事と同じ状態であると感じた。地域の幼稚園としての存在は重要であり、地域の人々の支援も大事である。

4. 子どもたちの遊ぶ姿

園で自由に遊ぶ時間はあまりないハプタレーの幼稚園の子どもたちであるが、わずかな時間の子ども遊ぶ姿があった。机上の勉強的な保育から子どもの遊びから学びになる保育のきっかけがそこにある。どうしても自由な遊びの姿に目がいく。

遊具が豊富な園庭で、円形ジャングルジム、ブランコ、滑り台、ぶら下がり回転塔等々で遊ぶ。

友だちと一緒に登る、滑る、ぶら下がる、楽しさ、嬉しさを味わっている。

大きな木で遊ぶ、ブロックで乗り物ごっこ（こちらの想像）等短い時間だが、子ども同士のかわりの姿が見られる。しかし思い切って遊べているのだろうかという疑問もある。

子ども同士で遊ぶ姿はどこでも一緒である。

子どもが見つけた遊び、楽しむ遊びは、マニュアルにはない。そこから子どもと共に学びへとつなげるには、どんなことが力になり、知ることができ、興味に繋がるのかである。



写真12) 遊具で遊ぶ



写真13) 乗り物ごっこ



写真14) 大きな木の下

写真12)、13)、14)のように、園庭での遊びは教員があまりかかわらない。本当に子どもの意思で遊んでいる。筆者がカマキリを見つけそっと子どもに差し出すと、慌てて手を引っ込めその場から逃げる。触るのがいやなのか、怖いのかどちらかであろう。周辺が豊かな自然であっても自然物、虫などにはあまり興味を示さない。

日本では、自然のかかわりを大切にしている園が多く、5月はマル虫に興味を持ち、蝶、トンボ、バッタ、カエル等 小虫、小動物をあげるときりがない。もちろん初めが嫌がる子もいるが、興味を持ち面白い、触る、追いかけるから、集めると保育の種になり、遊びが広がる。そこからお

話も広がるのである。

ハプタレー市立幼稚園は勉強の時間と遊びの時間がはっきりしている保育であると感ずる。

自然に関心を向ける保育をしなければ、園児も関心を示さない。

2014年に京都市内2大学の学生との交流があった。

その遊びの姿を捉えながら考察したい。

①「きらきら星」の歌を歌う②紙飛行機を作り飛ばす③ダンスを楽しむ④しっぽ取りを楽しむ
これは日本の幼稚園で楽しむものである。

「きらきら星」の歌は日本語、英語で歌う。周りの大人もよく知っていて、英語での合唱ができた。

②紙飛行機は写真15)のように、1つの机に3、4人が座り、2人の学生が折り方を教えていく。

3歳児にとっては中々難しい。しかし学生は丁寧に加えながら、完成させていく。それを園庭で飛ばしっこをする。飛ばすコツが分からない子どもたちであるが、学生に飛ばしてもらい笑顔で取りに行っている。折り紙はしても、それを使って遊ぶことをしないのかもしれない。保育室内は折り紙で様々なものが展示してあるが、作品にすることである。遊ぶおもちゃの発想が無いのではと思う。

飛ばすためにはどんな折り方の工夫があるか、風の影響は、飛ばし方は高くか、それとも低くするのか、スピードを出すために、飛ばす方法を考える。このひとつの紙飛行機から様々な学びがある。そんな気づきの保育が、子どもの興味を引き



写真15) 紙飛行機を作る

出し、科学的な思考の芽生えとなるのではと思う。

次は④しっぽ取りで、取り合いするより、学生が追いかけていくことにする。

コーディネーターの話だとしっぽ取りのような遊びはしたことがない。この人も一緒になって楽しむ。しっぽをとられないように、くくりつけてもちろん違反だがしかし、このように思い切り遊びこむということが幼稚園の中ではないのかもしれない。追いかける面白さ、思い切り走る快感、遊んでもらうことから、自分たちで楽しんでいく方向になってほしいと願う。届かない吊り輪を抱いてもらってぶら下がり、高いすべり台から待ち受けている学生の下へ滑り降りる。子どもの表情は満面に笑顔である。あの制作のときに泣いていた顔はないのである。

遊びで育つ子どもの姿の大切さを改めて思う。

5. コロンボ郊外の2つの幼稚園

(1) Golden Kids Pre-School

運 営	個人（園長）私立
園 児 （シンハラ人）	4歳児 15名 3歳児 11名 2歳半 2名 乳 児 5名（デーサービス）
教 員	2名（園長含） 乳児担当1名（スタッフ）
屋 内 設 備	保育室1 乳児室1
屋 外 施 設 遊 具 等	トイレ 手洗い場 ブランコ 階段上りができる遊具 すべり台 ダイヤ 小屋 園庭は狭い
そ の 他	保育料徴収 おやつ有り お弁当持参

民家を改装し、1つの保育室を衝立で仕切り、3歳児と2歳児のクラス、4歳児のクラスを運営している。4歳児は園長先生が担当で2、3歳児は若い先生であった。

奥に乳児の預かり部屋があった。そこには少し年齢が高い女性のスタッフがいる。

道を隔て、園長宅があり、そこからお茶、おやつを運んでいた。

トイレ、手洗いの整備については、NGO スラン

ガニ基金の研修でも力を入れて、当初は洗面器（台付）を配布していたと聴く。水道が付いている手洗い場が屋外に設置され、食事前、屋外で遊んだ後の手洗いの姿があった。

都市郊外での幼稚園では、トイレ、手洗い場は整備されているが、山岳部の茶農園地域の幼稚園ではまだ、整備されていない場合が多いし、あっても掃除等が行き届かなくて利用ができない状態であった。

(2) Co-op Pre-School

運 営	個人（園長）私立
園 児 （シンハラ人）	4歳児 12名 3歳児 8名
教 員	2名（園長含）
屋 内 設 備	保育室3 玄関ホール
屋 外 設 備 遊 具 等	トイレ 手洗い 井戸 ブランコ 網が張っている遊具 タイヤ 園庭は狭い
そ の 他	保育料 教材費徴収 お弁当持参

園長宅を改装し、保育室としている。

全員靴を脱いで入っているため、清潔である。靴は軒下に揃えて置かれてあり、下駄箱は無い。窓はあるが各部屋は暗い。電燈は各部屋に1つで電球のみで、部屋中を照らすものではない。

(3) 両園の保育の内容

保育室の提示物や保育を観察させていただいた限り、ハプタレー市立幼稚園とはそう変わらない。

知育教育に力を入れ、制作物、造形物に現れている。しかし、教材が豊富で、整理整頓がなされている。空き瓶、空き箱等の入れ物を利用した、教材の整理をし、個人の作品を重ねて貼り展示している。絵の具も使用し、合わせ絵、糸を絵の具で色をつけ折った紙の中を通す等の造形である。

ここに子どもの偶然な造形の楽しさを味わっている。

リズム遊び、ゲーム的な遊びも、先生の誘導、指示があり先生と共に楽しんでいる姿がある。



写真16) 整理された教材



写真17) 個人作品

子どものお誕生日表、一人ひとりのカレンダーが壁面に貼られて、数字をいれる。計画的な保育の展開をしている。何をどう教えていくかを明確にしている。

しかし、3歳児、4歳児の同じテーマであるがやり方、材料などの違いは考えられている。

訪問日、写真18)、19)のように蝶の制作で立体的に作るため、卵の殻を丸のまま使用する。3歳児にとっては四苦八苦で、卵の殻がつぶれてしまい泣いていた子もいる。

蝶の体を3歳児は新聞紙を丸めたもの、紙コップのようなものでつぶれないものを使用する教材の配慮が要るだろう。年齢を考えながらの保育の展開は今後も必要となる。

子どもの1年の成長発達の差は、大きいし、やることを楽しみ、その蝶を飛ばして遊ぶ喜びに繋げる事である。

後日、園長先生はスリランカの幼児教育の指導者の育成にも携わっているとお聞きした。



写真18) 蝶の制作 4歳



写真19) 蝶の制作 3歳

(4) 両園の子どもの遊ぶ姿

園庭は狭いが、遊具もあり、プランターに稲の栽培をしている。園舎、園庭はフェンスで囲まれ、

外側は木々が生い茂っている。人家に囲まれた状態である。都市郊外の住宅地であるが、スリランカの特徴的なバナナの木、ココナツの木等大木で密林の中の住宅地であり、幼稚園である。

園庭には遊具と大きな椰子の木がある。Golden Kids Pre-Schoolでは、伸び伸びと外で遊んでいる姿があった。保育室の活動が終わると、外遊びの時間となる。1日の時間配分が考えられ、外遊びが終わると昼食である。トイレ、手洗いを済ませ、保育室へ入る。清潔にするということも習慣付けるといこともなされていた。



写真20) 側転する子



写真21) 椰子の葉で砂遊び

狭い園庭だがうれしそうに「できるよ」と側転を見せてくれる。椰子の茎に砂を流して喜ぶ姿、ここに園庭で遊ぶ子どもの自然な姿に触れた。

側転ができるのが嬉しい、見てもらいたい、認めてもらう喜びがある。砂を茎に流す、面白い、さらさらと流れる、いい感触がある等色々と感じ、考えていると共に小さな発見もある。

子どもの遊ぶ姿は参観している側にも、癒される気持ちになり、屈託がない子どもに出会うので

ある。

Co-op Pre-School では、保育室がいくつもあり、人数の多い4歳児が2～3つの部屋で保育が進められている。制作の時間である。保育室には天井から、色々な立体的な造形物がぶら下がり、壁面には子どもの絵の作品が掲示され、窓の下には、ココナツの象が並べられ、造形展の様相であった。その制作物をどう子どもの遊びに取り入れられているか、遊ぶ姿はなく、展示物として扱われている。

風の絵、小鳥の絵が下書きされ、そこにちぎり絵として、色紙を貼っていく。

形、色合いを覚えていく。ワークブックも使用しているとのことだった。まさにお勉強の時間である。参観時間が短いため園庭での子どもの自由な遊びは見られなかった。



写真22) 保育室 (Co-op Pre-School)

6. スリランカの訪問幼稚園の保育内容の考察

遊びという本来の子どもの姿から、幼児期の保育へと繋げながら、制作も喜びと楽しさで、遊びへと発展させて欲しいと願う。

筆者も保育現場で、指導を受けるとき、制作、造形は、子どもたちの作業にはいけない。あくまでも、楽しさ、作る喜びになるように進めることだと教えられた。大人は見た目を重視し、喜びや楽しさを見落としてしまう。子どもの心情まで思い巡らさなければならない。筆者も造形表現は好きである。子どもの取り組む姿は見ているだけでも楽しいし大人にはまねのできない活動である。制作、造形は好きになってほしい。しかしあ

くまでも保育活動として捉えなければならない。

絵画、造形展を在る幼稚園で見る機会があった。筆者の現役時代も同じだが、展示するのは、子どもたちが保育の中で、活動し、表現したもの、遊びの跡が見えるものを作品として展示し、保護者、地域の人々に見ていただく。子どもも自分の描いたもの、作ったものを見ていただくのはうれしいし、認められると自信も付く。

子どもが遊びの中で作ったものを輝くようにするのが保育者だと教えられた。

子どもにとっては遊びの中の表現なのである。

同じ折り紙の動物でも、自由に顔等を描く部分があると、その子のもとなる。その子の表現となる。様々な教材を使用する経験も大切で、様々な教材の違い、使い方の工夫もある。そして、その活動、遊ぶ姿には子ども一人ひとりの人格が表れる。そのように子どもの活動や遊びを捉えたい。

折り紙は、日本から訪問があれば、折り紙をして保育交流する。それがスリランカの保育にも取り入れられているのである。やはり指先、脳の活性化によいとされている。

この2つの幼稚園は年齢別クラス担任制であった。シンハラ人家庭からの子どもたちである。

やはり都市に行けば、保育料を徴収し、経済面は少し保障されている。そこで、働く教員へ報酬もあるが、まだまだ小学校教員から比べると低い。公的支援もあまりない。そんな中でも熱心に幼児教育に携わる人々がいて、研修にも熱心に参加している。²⁾ 20数年間スリランカの幼児教育を支援しているスランガニ基金の馬場繁子さんの話では①親の幼稚園に対する期待は強い。②大きくなって困らないようにする。③文字を教えて欲しい。④英語を早くから教えて欲しい。

教員の支援の状況では①年2回の研修の実施と保育情報誌の2ヶ月に1回発行と無料配布②内容は絵本の紹介、折り紙、子どもにあった環境、幼稚園経営の方法、英語、タミル語の会話、子どもの出欠の把握方法、長期欠席は必ず理由を聞く③教材の紹介と廃材の利用方法④ココナツでの遊具作り(ブランコ)などである。

今教えるよりも長期的な視点で見ると、遊び中心の学びのほうが成功するということが少しずつ理解されてきたと述べている。

しかし教員の研修は具体的な保育の方法を学びたい、という希望が強いと聞く。理論的な事を学ぶ事が、後回しとなっている。

子どもの心身の成長発達などを学ぶ機会があると、子どもの見方、教育の方法が違った形で進められるのではと思う。

努力はされているが今のスリランカの幼児教育の現状である。

7. まとめ

スリランカの幼児教育を考えると、制作、造形、歌でのリズム表現である。日本でもされている事である。然しその方法、考え方の違いであろう。

大人からの押し付けではなく、あくまでも、子どもの心身の成長にあったもの、興味のあるもの、面白い、楽しい、うれしいと心情的なものになっているか、出来上がったものよりも、その作る過程を楽しんでいるか、作品よりも、ある時は遊びの道具として活用しているか、それがやる気、意欲につながり、遊びが楽しく展開する。

〇〇遊びとして捉えていき、中身が豊かになる。

保育は教師にとっても楽しい。ねらい、意図を持つ。そこに見通しを立て、予測し、環境を用意して、保育の工夫と創造がいる。

玉川学園幼稚園園長である粉川雅至先生が述べておられる。技術者だった方であったが、幼稚園経営をされるようになり、保育を勉強されている。

「自然を題材にした表現の保育」の実践の中、研修、公開保育等の話は、驚くべきことにいちいち納得できたのです。保育の話ではあるけれども基本的な部分で科学技術の分野と考え方が共通するのです。科学技術の世界では、常に未知のものを探求し新しいものを創りだすことが求められます。目の前で起こっている現象を謙虚に見つめ、過去の経験や知識を踏まえて自分なりの仮説を立てたり創意工夫を施したりして試行錯誤しながら前進します。幼稚園における「自然を題材にした表現の保育」でも子どもはまさにこれと同じプロ

セスをたどる。(途中省略) 子ども一人ひとりの興味の在り様によってあらゆる分野の才能の育ちに対して、道徳的な価値観の育ちにも資する。

目の前の子どもの姿を謙虚に見つめて創意工夫、試行錯誤しながら日々の保育に全力を傾ける。技術開発の世界も、保育の世界もマニュアルはありません。望ましい結果を得るための努力は簡単なものではありませんが、そこに仕事のだご味があり生きる喜びがあるのです。³⁾」と述べられている。

様々な保育の方法、形態がある中、まさに保育全般に通じる事なのではないかと思う。

よく言われる子どもの興味・関心・態度を大切にしながら、子どもと教師と一緒に保育を創り出していく。それが保育の創造なのである。

宮沢賢治の詩の朗読をしていた保育を見る。

それをもっと子どもに分かりやすく、カルタ取り、文字遊び、ことば遊びにするとそんなに無理をしなくてもいい。ことばの心地よいリズムで、聴くおもしろさがある。覚えるのは二の次であろう。また子どもが分かりやすい絵をみる。そして想像するのである。

やはり保育のやり方、中身の問題である。子どもが興味を持つ方法が大切になってくる。

詩の意味はその時は分からないかもしれないが、ふと口ずさむことができる。決して無理強いをしないことが鉄則であろう。

「のはらうた」くどうなおことみんなという、子どものたちへのメッセージのような詩の絵本がある。小虫、動物、草花、木々、太陽、月、星、石ころまでがつぶやいているのである。まさに子どもの想像の世界である。

身近な環境、選ばれた教材を、有効に活用しながら、子ども自身の視点を大切にしていって保育をめざしたい。そこには保育者として、子どもの遊びの質を見抜き、子どもの心に寄り添い、どこに学びがあるか、時間をかけて、保育する力量がいる。小さな子どもたちで、これから色々な力をつけ、自分のやりたいことを見つけられるような、

援助が保育者には求められている。スリランカというお国柄があり、幼児教育がこれからもっと、子ども側に立った幼児教育に進んでいくであろう。

現場の教員たちが、スリランカの子どもも自身が自由な気持ちで遊びを選び、楽しみ、生きる力が身につく援助ができるようにと願う。

日本の幼児教育も原点に立ち返る時であろう。

あるところでは、家庭でなされていた習い事が保育時間内でなされ、1週間のスケジュールが〇〇教室ということで決まっていると聞く。それが保護者のニーズなのだというのが、⁴⁾ある新聞記事に、ある幼稚園に通い出した子どもが、日々笑顔が消えていき、指しゃぶり、爪かみが増えた。その園は英語、スイミングを教えている、母親がどうしたものかと悩みを投稿している。

思い存分に遊び、友だちとかかわり、先生が好きという。本来、保育現場では、楽しくて、嬉しくて登園する子どもたちの姿がある。これが真の子ども姿であろう。

このように様々なことが保育の内容になっている今日、少し間違った方向に行っているのでは、と立ち止まって考えることである。どのように制度が変わっても制度よりも子どもへのかかわりの中での保育の内容であり、保育そのものの質である。

大人の都合を優先するのか、子どもを優先するのか、子ども優先が当たり前であろう。これからもこれが問われていく。

〈引用文献〉

- 1) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」内閣府、文部科学省、厚生労働省 フレーベル館 平成27年2月 p306
- 2) 馬場繁子 講演「スリランカにおける幼児教育の現状と課題」—NGOの視点から—お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター国際教育協力セミナー 2003年10月
- 3) 神谷栄司・前田美智代編著「保育の四季」—こころの成長— 山学出版 p255～p256
- 4) 神戸新聞夕刊「イイミミ」2015年10月21日

〈参考文献〉

1. 高杉自子著 「子どもとともにある—「保育の原点」 ミネルヴァ書房 2006年
2. 三井圭子 「スリランカ・ハプタレー地区幼稚園の教育現場から幼児教育における環境についての一考察」 兵庫大学短期大学部研究収録 No47
3. 橋川喜美代著「保育形態論の変遷」 春風社 2003年
4. くどうなおこ・ほてはまたかし著 「版画のはらうた」 株式会社 童話屋 1998年

子どもの発達と幼稚園・保育所における遊具の活用について

The Development of Infants and the Usage of Playthings in Kindergartens and Nursery School

宮 川 和 三* ・井 上 眞美子**
徳 田 泰 伸***

(平成28年1月20日受理)

要約

子どもの成長発達過程における大切な要素として、運動能力（行動）・体力（健康）・人間関係（信頼関係）が挙げられる。昨今、我が国では、子どもの運動能力低下への対策が教育課題の一つとなっている。運動能力の低下については、様々な要因が考えられるが、屋外での遊びが少なくなったことも、理由の一つに挙げることができよう。本論では、幼稚園教諭や保育士を希望して学ぶ学生を教育する立場から、幼稚園・保育所における「屋外遊具の活用」について考察する。

キーワード：遊具、子ども、幼稚園・保育所

keywords : Playthings, Child, Kindergartens and Nursery School

1. はじめに

筆者らは、本学が兵庫女子短期大学と称していた頃より、「幼児体育」「健康スポーツ科学」等を担当しており、教授年数は30余年になるが、昨今、社会情勢が変化していく中で、学生の保育者になろうとするモチベーションが低下し、子どもへの接し方、保育に対する想像力などについて問題を有する学生が多数みられるようになってきたことを危惧している。社会情勢の変化、生活実態の変化に伴い、保護者の保育に対する価値観、子育てについての考えなども変化していく中で、保育者養成校の教員として、どのように学生と関わり、指導していけばよいのかということが、大きな課題になっていると考えている。学生が、よき保育者となるために、モチベーションを高め、想像力を豊かにしていくためには、どのような保育者養成の在り方が必要とされるのか。このような問題意識を持ちながら、筆者らは、「幼児体育」「健康スポーツ科学」の授業を通して、学生との関わり

方を模索している。ここでは、筆者らが長年取り組んできた「屋外遊具の活用」の在り方を考察することを通して、上記課題の克服を模索することにした。

2. 幼稚園・保育所における遊具の変遷と活用について

幼稚園や保育所においては、幼児が興味や関心をもって遊具に関わり、このことを通して主体的に成長発達していくことが重視されている。幼稚園や保育所に設置されている遊具は、園児の成長発達に重要な役割を果たすものである。

幼稚園教育を中心にして述べれば、幼稚園における遊具については、学校教育法第3条を根拠に、幼稚園設置基準が、必要事項を規定している。

昭和31年に制定された同設置基準では、最低限必要と考えられる遊具が、すべり台、ぶらんこ、積み木、というように、個別・具体的に規定されていた。しかしながら、時代の変化、子どもの生

(*みやがわかずみ 保育科教授 体育学)

(**いのうえまみこ 保育科教授 舞踊学)

(***とくだやすのぶ 兵庫大学健康システム学科准教授 健康・スポーツ科学)

活実態の変化に伴い、平成7年制定の幼稚園設置基準が「幼稚園には、学級数及び幼児数に応じ、教育上及び保健衛生上必要な種類及び数の園具・教具を備えなければならない」と規定することにより、遊具に係る規定の大幅な大綱化が進められ、現在に至っている。

このような改定に基づき、幼児期にふさわしい生活が展開できるよう、各幼稚園や保育所などにおいて、その地域に応じた遊具が工夫され、従前のすべり台、ぶらんこといった固定・個別の遊具から、すべり台、ぶらんこ、ジャングルジム、登り棒などを組み合わせた総合遊具が多く取り入れられるようになってきた。また、自然環境を取り入れたビオトープや、木を主体にしたアスレティックなどが多く取り入れられるようになっている。

これらの総合遊具やビオトープに対しては、子

どもたちは強い興味や関心を示し、遊びにも創意工夫が見られるようになった。次に示す写真は、筆者らが今までに考案し設置してきたアスレティックやビオトープの一例である。



写真3



写真1



写真4



写真2



写真5



写真6



写真7

3. 子どもの遊びの実態について

子どもにとって、遊びは生活そのものであり、遊びを通して、運動能力、体力、知的好奇心、思考力を発達させ、人間関係など生活に必要な多くのことを学んでいく。そして遊びは、与えられるものでなく、基本的には子ども自身が作り出していくものでもある。しかし昨今、子どもの生活のリズムは、大きく変化してきている。2・3歳児からいろいろな稽古ごとに通うなど、「自由に遊ぶ」時間が、次第に制限されてきているように思われる。

今日、各地域において、就学前の子どもが遊んでいる姿をあまり見ることはできない。一部の報道によると、幼稚園や保育所が所在する付近の住民から「子どもの声がうるさい」という苦情があり、その苦情に対応するためのいろいろな施策が

とられているが、解決策は見つからない、とのことである。自由遊びは制限傾向にある、というのが実態のようである。

子どもは、自由に遊ぶことによって、自分自身がより楽しく遊ぶための多くのことを発見する。そして、工夫しながら遊びを展開していく。

大人目から見たら「危ない」「汚い」という行動であっても、子どもの目は輝き、多くの発見がある。衛生面や危険から子どもを守り、子どもの思いが発展していくように援助していくことが大人の大切な役割である。「〇〇をしてはいけない」というような規制を加えることが大人の役割ではない。このような観点からみれば、遊具は、子どもの遊びを発達させ、子どもの成長発達を促していく大きな役割を担っているものなのである。

子どもは出生すると、母親とのかかわりから始まり、家族へのかかわりへと広がっていく。そして1歳ぐらいになると自分で自由に行動できるようになり、行動範囲が広がってより多くの相手を求めるようになってくる。また3歳から4歳ぐらいになってくると、自分と同じ仲間を求めるようになり、仲間遊びが始まる。さらに仲間とのかかわりの中で、いろいろと試行錯誤しながら遊びの楽しさを身につけていく。

現在ではこのような自然発生的な子どもの遊びが、少子化、核家族化などの社会情勢の中で「作り出す遊び」から「与えられる遊び」へと大きく変化してきている。その一つの例がコンピュータゲームの普及である。コンピュータゲームは、人と向き合うのではなく機械との向き合いであり、安全ということが優先され体を動かすという体験が殆どないように思われる。もちろん安全性の確保は大切であるが、幼児期の子どもにとっては、成長発達から見た順序性においても、体を動かし、仲間とかかわって遊ぶという体験をすることがより大切であると考えられる。しかしながら、子どもの遊びの実態は、作り出す遊びから与えられた遊びへ、自然を対象とした遊びから規格品を対象とした個人的な遊びへ変化していると思われる。

4. 保育者養成校の学生が考案した遊具について

現在、幼稚園教諭、保育士資格を取得することを希望して学んでいる学生は、少子化、核家族化という社会情勢の中で乳幼児期を育ってきているので、殆どの学生が養成校において実習に行くまで乳幼児とかかわる体験をしていない。実習に行くと、はじめて乳幼児期の子どもとかかわったという学生が殆どである。実習記録を見ても「○○をしていた」という表面的なとらえ方をしている。

遊具においても、子どもがどのように活用しているかということを見るのではなく、すべり台はすべるもの、ぶらんこは乗ってこぐものという、型通りの見方をしている学生が多く、「○○ちゃんは上手に滑っていた」とか、「上手にこいでいた」とかいう見方が多く、逆に「○○ちゃんは滑らずにすべり台の下でばかり遊んでいる」というような見方をしている学生は少ない。

実習後、「保育内容」の授業において、「どのような遊具が子どもの遊びをより豊かにし成長発達を促す手立てとなっているか」ということをテーマに、「園庭に設置することが望ましい遊具」の模型の制作を指導した。学生をグループに分け、制作に必要な材料は、机上で作業のしやすい割り箸、段ボール、接着剤などを基本として提示した。

授業の進捗状況と学生の反応について

- ①グループ（4～5名）に分かれ制作する。
- ②材料は身近にあるものを生かし、どのグループも同じものを使用することを原則とする。

提示した材料

段ボール タコ糸 割り箸

提示した用具

カッター ボンド はさみ

③指示事項

- ・割り箸を切ったりつないだりして遊具の基本形を作る。
- ・グループで協力して想像力をふくらませ、子どもがどのように遊ぶかを考えてオリジナルな遊具を作る。
- ・大型遊具、中型遊具、小型遊具に分け、それ

ぞれの遊具の特徴を生かしたものを作る。

- ・子どもが遊んでも壊れない、安全性を考慮したものを作る。

④学生の制作における感想と反省

- ・子どもがどのように遊ぶかをイメージすることは難しく、取り組むまでに時間がかかったが、グループで話し合いながら楽しく制作することができた。
- ・アスレチックといわれても、今までに経験したことがないので、イメージすることができず、時間内には制作することができなかったが、グループで試行錯誤しながらなんとか糸口を見つけることができた。
- ・幼稚園や保育所で見た普通のぶらんこやすべり台を作る予定をしていたが、実習で子どもがいろいろと考えて遊んでいたタイヤブランコを思い出し、グループで話し合い、タイヤを主体にした自由に変化ができる遊具を考えて制作に取り組んだ。
- ・アスレチックの制作をすることにしたが、公園で見たアスレチックのイメージしか思いつかず、どのようにすれば子どもが楽しく遊び、体力の向上につながるかということを考えていくことが難しかった。これから公園などでアスレチックを見たら、どのような意図で作られているか、関心をもって見ていきたいと思った。
- ・今まで子どもが遊具を使ってどのように遊んでいるかについて考えたことがなかったので、遊具の制作についてイメージがわからず難しかった。

⑤作品例



写真8

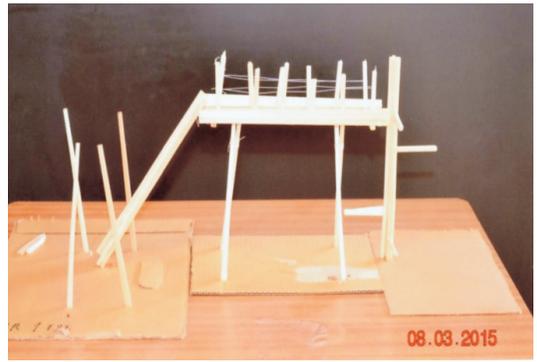


写真11



写真9

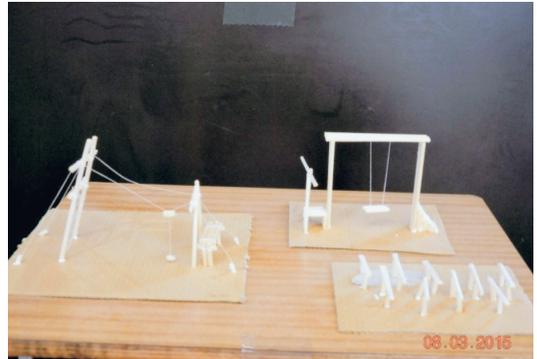


写真12

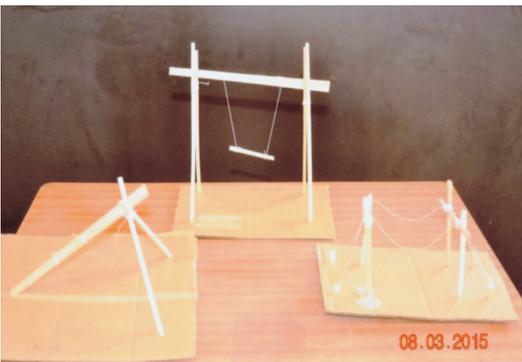


写真10

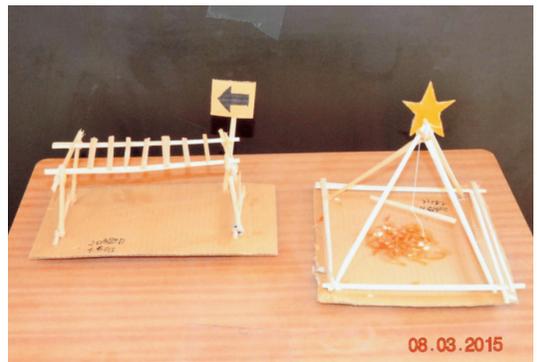


写真13

これらの作品を見ても、子どもがいろいろ考えて遊びを豊かにしていくということを主たる目的とする独創的なものは殆ど見られず、既成の遊具を模倣しているものが多い。いろいろな面で体験の少ない学生においては当然の結果であると思われるが、今後の指導において、子どもの成長発達を促し、幼児期にふさわしい生活が展開できる遊具が考案できるように指導していきたいと考えている。また、それぞれが意見を出し合って一つのものを作り出すという経験が少ないので、自分の意見をしっかりと持って話し合い実践させる機会をつくりたいと考えている。

5. まとめ

乳幼児期の子どもの実態を理解し、発達の特徴を踏まえ、幼児期にふさわしい生活ができるようにするための遊具の在り方について、より考察を深めていきたいと考えている。兵庫大学附属加古川幼稚園を活動の場として、従前から多くの木製遊具やアスレティック、ビオトープなどの制作を行ってきたが、木の耐久性や、鳥インフルエンザ流行などの問題があり、多くのものを長期に保持していくことが困難となっている。自然環境が少なくなり、高学歴社会において偏差値教育が進行するなどの情勢の中で、子どもの遊び場、遊ぶ時間は減少している。このような社会現象の中で、幼児期にふさわしい生活を展開していく上で、幼稚園や保育所における保育の役割は大きい。幼稚園や保育所に設置され整備されている遊具は、子どもの成長発達において大きな役割を担っている。アスレティックやビオトープについては、いろいろなところで研究され、多くの幼稚園や保育所で普及してきている。保育者養成校においても、学生がこれらの実態を理解し、より多くの体験ができるよう指導し、また、学生の保育に対する意欲的な取り組みを可能とする教育を推進したいと考えている。

〈参考文献〉

1. 文部科学省「幼稚園教育要領」2008年3月
2. 厚生労働省「保育所保育指針」2008年3月
3. 徳田泰伸「遊び・運動能力・体力づくり—変わりゆく子どもたちの姿を追って—」2013年 みらい
4. 和久洋三「おもちゃから童具へ」1978年 玉川大学出版部

40人規模クラスにおける能動的な学習活動の実践報告

The Practical Report on Active Learning at 40 Students-sized Class

杉 田 律 子*

(平成28年1月20日受理)

要約

近年の大学教育においては「アクティブ・ラーニング」の導入が求められ、兵庫大学・兵庫大学短期大学部においてもFD委員会を中心に「アクティブ・ラーニング」の導入に関する研修会が開催されている。本稿は2015年9月30日に開催された「平成27年度アクティブ・ラーニングに関する研修会（第一回）」で発表したアクティブ・ラーニングを導入した実践報告をもとにして、短期大学部保育科40人規模のクラスにおける能動的な学習の実践例をまとめるものである。

キーワード：チーム基盤型学習、能動的学習、プレゼンテーション

keywords：Team-Based Learning (TBL), Active Learning, Presentation

1. はじめに

近年、大学教育においては能動的な学習の重要性や学習者主体の学びを重視する傾向にある。

平成20年度の「学士課程教育の構築に向けて」（中央教育審議会，2008）においては、学士課程共通の学習成果として、知識が体系的に理解されていることと同時に、コミュニケーションスキル・情報リテラシーなどの汎用的スキルや、チームワークへの指向性、市民としての責任などの意識・態度が育成されていることがあげられ（「学士力」）ている。

また、平成24年度の「新たな未来を気づくための大学教育の質的転換に向けて～障害学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（中央教育審議会，2012）がまとめられ、「アクティブ・ラーニング（能動的学修）」をキーワードとして、大学教育の質的転換の重要性が提唱された。この答申の用語集によると「アクティブ・ラーニング」とは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」である。このような一連の流れのなかで、教育の目標についてなど根本的

な問題とともに、教室の設備やe-ラーニングシステム、タブレットを活用した学習などハード面の「わかりやすい」部分での改善が求められてきている。

図1はNational Training Laboratoriesの研究をもとにして高知県須崎市教育委員会が作成した学習の定着率を表した図であるが、教授者が口頭で講義を行う「レクチャー」の学習定着率5%など従来型の受動的な学習の定着率が低いのに対して、集団で討論する「ディスカッション・グループ」方式の学習定着率が50%、学習者の「体験学習（PBD）」が75%などと、より能動的な学習が学習の定着には効果的であることはよく知られている。

また、中教審が「アクティブ・ラーニング」で「学習」ではなく「学修」という用語を使っているのは、大学の場合、「アクティブ・ラーニング」を実現するためには、1時間の授業に対して倍以上の時間の予習・復習を自分ですることが単位取得には必要となり、なおかつ予習・復習を自ら行う能動的な姿勢を求めているからである。また、グループ討論やディベートを実施するには予備知識

（*すぎたりつこ 保育科講師 特別支援教育学）

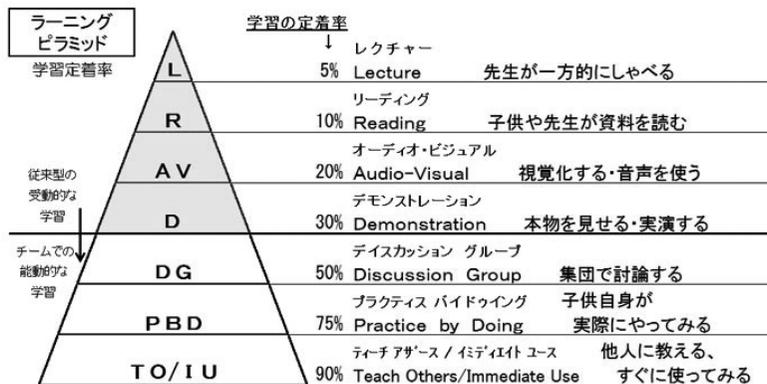


図1 学習の定着率（高知県須崎市教育委員会HPより）

が必要であるだけでなく、調査等にも文献を読む力や、校外でフィールドワークを実施する観察力や記録する力が必要になるため、「アクティブ・ラーニング」を導入するには学生のリテラシーの質と学びへの意欲の向上が不可欠となる。

しかしながら、近年の大学教育においては質と意欲に問題を抱えている学生が増加しているのが現実である。本学においても、アクティブ・ラーニングを勧める校内研修を開催する取り組みを行ったり、「アクティブ・ラーニング・ゾーン」の整備が行ったりと、「アクティブ・ラーニング」を目指した学習環境を整えつつある。しかしながら、いくら「アクティブ・ラーニング・ゾーン」のようなハード面を改善したとしても学習者の取り組みが変容するとは限らない。そのため、教員個々人が科目の目的や到達目標に合わせ、また受講者の資質や意欲に適した授業のあり方を、授業形態や履修の条件、授業の進め方などを工夫して行っているところである。

本稿では、「アクティブ・ラーニング」の訳として中教審の答申の「学修」を使用せずに、「学習」を使用しているが、これは本学短期大学部保育科の教育課程ならびに学生の質と意欲を考慮して、学生が学修活動を行える状況にはないと判断することから、今後は「アクティブ・ラーニング」を能動的な学習として記述する。

能動的な学習の導入には、教材・教具、設備などの物質的な面を充実させるとともに、1人の授

業者が担当する学生数の制限など人的な面も充実させる必要があるが、本学短期大学部においては、設備面、人的な面においても十分といえる環境ではないが、「アクティブ・ラーニング・ゾーン」を使用した活動例として実践報告を行うものである。

2. 学習の取り組み

今回、能動的な学習活動を実施した科目は、保育科第三部3年生対象の保育士資格必修科目「障害児保育B」である。筆者は保育科第三部3年生2クラスの「障害児保育B」を2014年度から担当しており、担当1年目の2014年度よりチーム基盤型の能動的な学習の取り組みを行っている。担当の2クラスは、双方とも40人規模のクラスであり、半期15回の講義のうち、後半部分の講義について、1クラスを6、7人ずつ6つのグループに分けてチーム基盤型の能動的な学習の取り組みを導入している。2015年度は2014年度の実践を踏まえ、より受講者が能動的に学習に取り組むことができるよう講義計画を立てた。

「障害児保育B」の講義目的は、保育者が障害児支援を行うために最低限必要な知識と心構えを身に着けることであり、その目的を達成するために、個々人の学習だけではなく、クラス内に6、7人のグループ編成を行い、1つのチームでテーマを設定し、協力して学習を行うというチーム基盤型の能動的な学習を取り入れた。グループ活動

を通して互いに協力し合うことにより、リテラシーの向上とともに共同して学習活動を行う力を培うこと、自らの考えをチームのメンバーに表現する力を向上させること、そしてさらに、その成果をプレゼンテーションすることによって他者に伝える力を向上させることを目指している。

受講者は保育科第三部AクラスおよびBクラスの2つのクラスである。2クラスとも40人規模のクラスであり、それぞれのクラスは同日の1時限目と2時限目に開講されている。2015年度の履修者は、1時限目のBクラスが男子1名、女子38名の合計39名が受講、2時限目のAクラスが再履修者1名を含む女子38名が受講している。半期15回の講義のうち、前半6回を授業者による教授から成る知識や問題意識を育てることを目的とした講義を行い、次の4回を共同的な活動を行う力を培うことを目指したチーム基盤型の能動的な学習、その後の2回をチームで学習した成果を他者へと伝え、表現する力を培うことを目標としたプレゼンテーション・ソフトを活用したプレゼンテーションの発表会に充てた。このグループ活動は、グループで意見を出し合って、今まで学習してきた障害に関する問題をテーマに選び、文献調査を行い、研究を行った結果をプレゼンテーションするという活動である。

(1) 講義1～6回（教授者主導型）

講義1～6回については、通常の講義室を用いた、クラス全体による教授者主導型の講義を行った。

講義1回目に今までの学習において学習している障害について知識に関する簡単なまとめのレポート課題を行った。この課題の作成により、最終学年の最後の半期の学習の仕上げである、という意識を持たせることを意図している。

2014年度の学習の取り組みでは、各グループが1つの障害をテーマに選んでグループ学習に取り組んだものの、文献をまとめるにとどまったグループが続出したことを反省し、今年度は受講者がより問題意識をもって学習に取り組めるように配慮した。前後の講義の中で障害児支援の実践を

表1 障害児保育Bの講義計画

	講義の内容
1	障害児保育の理念／今までの学習の振り返り課題の作成
2	障害児保育の現状①保育・教育の取り組み
3	障害児保育の現状②保育現場の取り組み／レポート作成
4	障害児保育の現状③福祉機関の取り組み
5	障害児保育の現状④医療機関の取り組み
6	障害児保育の現状⑤医療（出生前診断と生命倫理）
7	グループ活動
8	グループ活動
9	グループ活動
10	グループ活動
11	グループ活動
12	グループ活動（発表会）
13	グループ活動（発表会）
14	グループ活動のまとめ
15	学習のまとめ

まとめたVTRの視聴を多く取り入れたり、新聞記事を活用した出生前診断と生命倫理に関わる問題提起を行ったりして、受講者が障害児保育の現場が抱える問題に興味をも持ちやすいように配慮を行った。

また、講義3回目にレポート課題を各自に与え、各自が興味のある障害についての概要や基本的な支援の方法についてまとめさせた。レポートの内容は、その障害に興味を持ったきっかけ、障害の概要、支援方法、保育所・幼稚園で予想される配慮であり、その後のグループ活動で調べるべき事柄について、事前に自分なりにまとめておく方法について学習することを目的としている。その際、テーマ設定の理由や保育所・幼稚園での配慮の方法などについて重点的に記載させ、教科書を引用しただけのレポートではなく、自分自身の考えが反映したレポート作成につながるように配慮を行った。

(2) 講義7～11回

(チーム基盤型学習；スライド作成)

グループ活動はアクティブ・ラーニング・ゾーンで行った。アクティブ・ラーニング・ゾーンでは、PCの小さな画面だけではなく、大画面にPCの画面が映し出されるため、グループ全員が画面を見ながら操作ができることで、活動から外れようとする学生を減らすことができるという効果があった。

受講者はコンピュータ演習を履修しているため、プレゼンテーション・ソフトの技術は習得済みであり、また、各グループの中にPCの技術が高い受講者が数名はいるため、その学生を中心としてスライド作成を行っていた。

また、授業者が各グループのテーブルを巡回する中、チームを主導する学生を中心にして、グループの話し合いの方向性や文献検索の手法やまとめ方の助言を行った。毎回の講義の最後に作成したスライドを印刷して提出させ、その添削を行った。次の講義時に提出物の返却を行うのであるが、その際、グループの進捗状況を確認しつつ、適宜、その日の活動の助言を行った。

2015年度の各グループのテーマ設定と研究方法は表2の通りである。2クラス合計12グループの

中で、文献研究のみにとどまったのは2グループのみであり、アンケート調査が4グループ、聞き取り調査が1グループ、何らかの教材研究に取り組んだグループが5グループであった。

各グループともテーマ設定、スライドづくりには苦戦をしていたが、2014年度はほとんどのグループが文献研究だけにとどまってしまっていたのに比べ、今年度は講義計画の前半により問題意識を持ちやすい講義内容を心掛けたことに加え、スライド作成の手引き配布したことも効果的であったと考える。配布したスライド作成の手引きは、①テーマ設定の理由、②研究の目的、③研究の方法、④結果、⑤考察、⑥今後の課題という一連の流れに沿ってスライド作成をすることを明示したものである。

また、今年度は毎時間ごとに、スライドを印刷し提出させたもの添削して返却することを繰り返し続けたため、スライドづくりの体裁を整えることができ、また論理的に表現する練習となった。以下に、1つのグループのスライドの一例を示す。

表2 各グループのテーマ設定と研究方法一覧

	グループ	テーマ	研究方法
1 時 限 目	1	自閉症スペクトラム	文献研究
	2	視覚障害	文献研究
	3	出生前診断	アンケート調査
	4	ダウン症候群	教材研究（コミュニケーション・カード）
	5	聴覚障害	聞き取り調査
	6	自閉症スペクトラム	教材研究（集団保育時の絵カード）
2 時 限 目	1	ダウン症候群	アンケート調査
	2	自閉症スペクトラム	教材研究（園だより）
	3	ADHD	教材研究（啓蒙用プレゼンテーション）
	4	知的障害	教材研究（啓蒙用プレゼンテーション）
	5	サヴァン症候群	アンケート調査
	6	自閉症スペクトラム	アンケート調査

ダウン症について

1班

スライド1

はじめに

実習先でダウン症の子どもがいた。

現代社会では、晩婚化による高齢出産でダウン症の子どもたちが保育園で見られるようになってきた。それに伴いテレビや新聞などでダウン症に対することが多く報道されているが、一般の人たちはダウン症に対してどこまで知識があるのかを知りたくて調べてみようと思った。

スライド2

ダウン症の定義

ダウン症とは21番目の染色体が3本ある染色体異常による、生まれつきの精神疾患発達の遅れや特有の顔立ちなどの特徴がある。

合併症を引き起こす可能性もある。

スライド3

ダウン症の由来

身体的特徴から由来している。かつて平たい顔や斜めに吊り上がった目などの外観上の特徴のある「蒙古人」からとって蒙古症と名付けられた。

現代では、ダウン博士にちなみダウン症と呼ばれている。

- Xn-gck8b9hu04j8m3b5mm.jp

スライド4

ダウン症の代表的特徴

身体の発達や精神の発達が遅れている。

特有の形をして生まれてくる。

感染症への抵抗力が通常よりも弱いため病気にかかりやすい。

スライド5

身体的特徴

1. 鼻が低く耳が顔の少し低い位置についている
2. 小指の関節が1本少ない
3. 足が短く、親指と人差し指の間が広い
4. 体が柔らかい
5. 首の後ろの肉付きが良い

<http://choji.jp/archives/147>

スライド6

精神的特徴

1. コミュニケーションをとる際に行き違いが生じやすい
2. 聞くことが苦手
3. 感受性が豊か
4. 何事もすぐ行動に移す

<http://www.barbaraginagarrett.com/downsyndrome>

スライド7

ダウン症の検査項目

	羊水検査	血液マーカー検査(クアトロ検査)	臍帯検査	超音波検査	新生児出生前診断(35歳以上)
検査内容	羊水を採取し疾患の有無を確かめる検査	血液採取から染色体異常の検査	子宮に針を刺し臍帯を採取する検査	胎嚢にエコーを当て大まかな胎児の異常を検査	血液を採取(DNA(染色体)以上)の検査
検査精度	99%	ダウン症: 96.4%, 18トリソミー: 79.5%	99%	99%	99%
検査期間	妊娠15週~18週	妊娠15週~21週	妊娠9週~14週	妊娠10週~15週	妊娠10週~18週
検査リスク	一般的であるが流産の恐れがある	羊水検査と比べて手頃	羊水検査同様流産の恐れがある	なし	なし
判明する疾患	ダウン症候群(21トリソミー) エドワード症候群(18トリソミー) 13トリソミー	21トリソミー、18トリソミー	21トリソミー、18トリソミー	脳、腎臓、心臓、四肢の異常、21トリソミー	21トリソミー、13トリソミー

スライド8

母親の出産年齢ごとのダウン症の確率

母親の年齢(歳)	ダウン症のリスク	染色体異常のリスク
20	1/1,667	1/526
25	1/1,250	1/476
30	1/952	1/385
35	1/376	1/192
40	1/106	1/66
41	1/82	1/53
42	1/63	1/42
43	1/49	1/33
44	1/38	1/26
45	1/30	1/21
46	1/23	1/16
47	1/18	1/13
48	1/14	1/10
49	1/11	1/8

Source: Maternal Fetal Medicine: Practice and Principles, Creasy and Rouse, eds., W.B. Saunders, Philadelphia, PA, 1995:71. Reproduced with permission.

スライド9

療育施設

- 療育とは、障害児を医療的に育成することである。障害児の成長や自立支援のための、医療、治療、育成、保育、教育が「療育」である。
- 療育施設では、作業療法士や医師の指導で療育を受けることができる。

スライド10

療育施設

- ダウン症の子どもは療育施設に週に1~2回通いながら、施設と家庭が連携し、ある程度自分ですることができるようにする。
 - 自分のできることが増えてきたら保育所や幼稚園に通う。
- 引用療育とは？発達障害・知的障害の特徴をチェック 2015年11月11日
<http://shogai.web.fc2.com/support/sup001.html>

スライド11

ダウン症の保育

1. 子どもの心に寄り添って共感する。
2. 達成感をたくさん味わえるような保育を大切にする。
3. 意欲がもてる声かけをする。
4. 子どもの行動を褒め自信をもてるようにする。

スライド12

日本人のダウン症の有名な人

- 金澤 翔子さん:書道家 高井 萌生さん:俳優
 越智 章仁さん:ピアニスト 中村 順二さん:画家
 川田 大志さん:写真家 新倉 壮朗さん:ミュージシャン

スライド13

研究目的

一般の方がダウン症について知識がどこまで理解されているのかを明らかにするためにアンケート調査などを行い実態把握。

スライド14

アンケート調査の結果

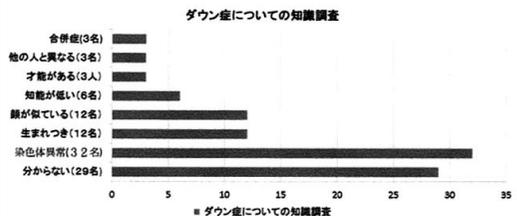
計31名に配布し、回答人数は31名
 回収率は100%

1. 対象者の年齢:10代 5名
 20代 15名
 30代 2名
 40代 5名

年齢
 ■ 10代 ■ 20代 ■ 30代 ■ 40代

スライド15

2 ダウン症について知っていること



スライド16

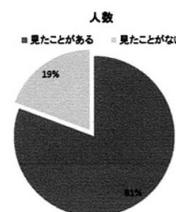
分析

10代は障害者という枠でしかダウン症を見ていないが、20代から40代は「優れた才能を持っている」と答えた人が多かった。
30代から40代は子育て経験があるため「育児が大変」と答える人も多い。

スライド17

3 ダウン症の子どもを見たことがあるか

見かけたことがある: 25名
見かけたことがない: 6名



スライド18

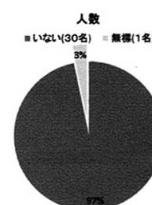
4 ダウン症に対する印象

特にない(5名)、分からない(2名)、障害者(3名)、生活に不自由なことがある(3名)、顔に特徴がある(8名)、人なつこくてかわいい、まじめ、前向き、特技が優れている、穏やかな性格の人が多く、人の感情を読み取ることが得意な印象を持っている、それぞれ個性がある、才能がある子が多い(6名)、みんなと一緒の行動をすることが難しいことがたまたまある、あまり背が高くない、育児が大変(3名)、良く人を見てしっかりと聞いている、あまりいい印象はない、成長が遅い、社会的に差別がある、人による、本人が辛そう

スライド19

5 クラスにダウン症の人はいたか

いない: 30名
無標: 1名



スライド20

考察

- ▶全体を通して、ダウン症について知らない人が多かったのは社会的にあまり関心が向けられてこなかったことも背景の一つであると感じた。
- ▶意見の中にもあったようにまだ社会的に低く見られ、差別が残っている現状が見られた。
- ▶アンケート結果から、障害に対しての考え方が異なっていた。

スライド21

今後の課題

- ✓今後の課題として、知らなかったことは一般の人たちが障害に対しての印象やダウン症の保育について、ダウン症の検査項目や出生年齢ごとのダウン症の確立など、私たち自身調べるまで知らなかったことも多かったのを機に更に知識を深めたい。
- ✓将来保育士として働いている時に、ダウン症の子どもを受け持つ可能性はある。クラスの子どもたちが障害に対して偏見を持たず仲良く生活ができるように保育をし、保護者の方々や地域の方々にもダウン症について理解をしてもらい、障害に関係なく家族が楽しく毎日を送っていただけるようにしていくことを課題としていきたい。

スライド22

参考・引用文献

ダウン症とは ふみみえる famiyell.net
2015年11月11日 <http://mihama-w3.n.fukusi.ac.jp/circle/d-sports/syougai/4-2-5.htm>
ダウン症検査の最新事情—NAVERまとめ 2015年11月11日
<http://matome.naver.jp>
ダウン症の有名な一覽芸能人で家族がダウン症の方まとめ
2015年11月11日
<http://down-and-up.com/otherdowninfo/down-yuumei-ichiran/>

スライド23

参考・引用文献

話題の壹NET 2015年11月11日
<http://happy-life1192.jp.net/311.html>
年齢別のダウン症確率を紹介 妊婦力2015年11月18日
www.meg0405.com/dawnshow-899
<http://sanjuntunokisetsu.jp/statistics> コンカツノコソ
http://acceptions.org/?page_id=566 NPO法人アクセプションズ
http://futabanokai.com/free_news/news070601.html ふたばの会ニュース
<http://jikei.health-ask.net/ways-of-coping/stereotypy/> 自閉症ガイド

スライド24

(3) 講義12~13回

(チーム基盤型学習；プレゼンテーション)

各グループの発表は2週に分けて実施し、1週につき3グループが発表を行った。10分以内の発表とし、その後、10分程度の質疑応答を行った。また、自分のグループ以外の発表については、図2のプレゼンテーション評価シートに評価を記入させるようにした。評価の基準は①発表態度の良さ②スライドの見やすさ③発表内容の高さの3点であり、その総合評価を5段階で記入するように設定し、発表の質だけではなく、聞き手に伝えようとする態度や表現力に留意するように促した。

また、各グループの発表前には必ず一人ひとり

氏名を名乗り、グループで声を合わせて「よろしくお願いたします。」とあいさつをしてから発表を始め、質疑応答後は「ありがとうございました。」とあいさつをしてから発表を終えることを徹底した。これらのマナーを徹底することにより、プレゼンテーション評価シートの発表態度の良さの項目についての自分なりの評価基準を持てるように配慮を行った。以下の4名の学生のプレゼンテーション評価シートを見る限り、自分なりの評価の観点に基づき真摯な態度で評価を行っていた様子である。スライドの見やすさについては、イラストやアニメーションの動きがあるグループの評価が高い傾向にあった。そして、発表

第三部3年生「障害児保育B」プレゼンテーション評価シート

1班 ()

	高				低	コメント
発表態度の良さ	5	4	3	2	1	
スライドの見やすさ	5	4	3	2	1	
発表内容の高さ	5	4	3	2	1	
総合評価	5	4	3	2	1	
よくわかった所						
もっと詳しく知りたい所						
関心を持ったことなど、何か一言						

図2 プレゼンテーション評価シート

	高				低	コメント
発表態度の良さ	5	4	③	2	1	発表してない人もいた。
スライドの見やすさ	5	4	③	2	1	サンプルは見やすい。
発表内容の高さ	5	④	3	2	1	喋るのが早くて聞きにくい。
総合評価	5	④	3	2	1	発表が長過ぎてしどろくた。もう少しおもしろい発表してほしい。
よくわかった所	高出生率になると障害の確率が増える。					
もっと詳しく知りたい所	どれぐらい肉付きがいいのか？					
関心を持ったことなど、何か一言	身体的特徴の首の後ろの肉付きがいいなど 知らなかったのに関心を持った。					

評価シート1

	高			低	コメント	
発表態度の良さ	5	4	3	2	1	マスクを取って発表をしたほうが聞きやすいです。
スライドの見やすさ	5	4	3	2	1	文字ばかりで、見ていと疲れてきます。
発表内容の高さ	5	4	3	2	1	具体例がなく、あまり理解出来たかもこちら側も不明。
総合評価	5	4	3	2	1	図も数字ばかりで、あまり分からなかった。
よくわかった所	保育現場の中で、クラスの中で、偏見を持たないよう 調べることをとても良かったと思います。					
もっと詳しく知りたい所	前半の発表で「色の」あれはもう少し理解が深められたと 思います。また、保育の中で、ダウン症の子どもの受け止め、自信につなげられるようにし					
関心を持ったこと など、何か一言	「ダウン症のに対する印象」の所も、自分達で、図を使えば、 もう少し理解が深められたと思う					

評価シート2

	高			低	コメント	
発表態度の良さ	5	4	3	2	1	全員で分担して読んでも良かったと思いました。
スライドの見やすさ	5	4	3	2	1	文字が少し小さくて見にくい所がありました。
発表内容の高さ	5	4	3	2	1	とてもダウン症について詳しく調べていると思いました。
総合評価	5	4	3	2	1	ダウン症について深く知ることができました。
よくわかった所	ダウン症の由来やダウン症の身体的特徴、高齢出産でダウン症の子どもが生まれる確率 が高まることなどがわかりました。					
もっと詳しく知りたい所	具体的な事例があったらもっとわかりやすいと思いました。 アンケート調査をした対象者は理解のある人が多かったのかな、と思いました。もっと多くの様の人からアンケート をしたら結果が変わっていたかもしないです、それについて知りたいと思いました。					
関心を持ったこと など、何か一言	ダウン症は高齢出産の方が生まれる確率が高くなるということをより詳しく 知ることができました。					

評価シート3

	高			低	コメント	
発表態度の良さ	5	4	3	2	1	話して、子ども以外に静かで聞きやすかったです。
スライドの見やすさ	5	4	3	2	1	シートが統一されて、子供が表が小さくみえにくかった。
発表内容の高さ	5	4	3	2	1	ダウン症についてまとまらなくて、アンケートもあり、一般の人の考えはわか りませんでした。
総合評価	5	4	3	2	1	良かったり、面白い内容でした。
よくわかった所	ダウン症についてよくわかった。 (症状、特徴、ゆえに、保育の仕方)					
もっと詳しく知りたい所	ダウン症に対する支援の仕方をもっと詳しく。 有名人が何をしているのか。					
関心を持ったこと など、何か一言	もっと一般の人に対してアンケート調査をしてどう思っているのか、知りたいとい 思いました。 ダウン症について					

評価シート4

内容の高さについては、評価が二分するものがあった。先に挙げたスライド1～22のグループの発表については、4や5点など高い評価を付けている受講者が多い一方比較的低い3という評価の学生も多かった。

(4) 講義14～15回(学習のまとめ)

チーム型基盤型学習活動が終了した後、講義14回目にはグループで研究発表したスライドを、各個人でレポートにまとめなおす作業を行った。グループではプレゼンテーション・ソフトを使用してスライド作成を行い、グループごとに結果をまとめ、考察を行ったが、その発表を各個人がレポート形式に直して、自分なりの考察を行うといった活動である。また、講義15回目には筆記試験を行い、障害者支援に関わる基本的な知識の確認を行った。

3. 考察

今回の実践は、受講者が様々な障害者問題から自らの興味関心のあるテーマを設定をして、文献研究やアンケート調査または教材研究などを行い、プレゼンテーションを行うという試みである。この実践の結果、スライド作成やグループ発表という目新しい活動に興味を持ち、ある程度は受講者が能動的に学習に取り組むことができ、一定の成果が上がったが、各グループの文献研究のほとんどがネット検索に終始してしまったり、障害の理解が中途半端な段階にとどまっていたり、とまだまだ不完全なものではあった。さらに質の高い学習にしていくためには、学生のリテラシーの質と意欲の底上げが必要である。また、2クラス合計12グループの指導を1人の授業者が行うしかない現状では、学生への指導が十分にできているとは言えない。

しかしながら、授業者の計画と配慮、または学生が課題をこなしているのかを詳細に確認しながら講義を実施し続ける中で、当初は課題をこなすために「学習させられている」状態から、居残ってスライド作成したり、図書館に文献を探しに行ったり、アンケートの集計を懸命に行ったり、

と能動的に学習しようとするグループが一定数出現してきたことは1つの成果であると言える。

また、本稿ではプレゼンテーション評価シートの詳細な分析ができていないが、発表態度やスライドの見やすさの評価についてはあまり個人差が見当たらなかったが、研究の質に対する評価には受講者によってばらつきが見受けられた。評価シートの内容と受講者の学生の学習成果とを比較すると、研究の質の評価には聞き手側の学生の力の差が関係しているのではないかと予測される。今後は、プレゼンテーション評価シートの分析を行って、学生の個人差についての検討を行い、今後の学習支援に役立てていきたいと考える。

参考・引用文献

- 橋本信子 2013 能動的学習を促すための知的交流の場を作る取り組み 大阪商業大学論集 第9巻第2号(通号170号)
- 高知県須崎市教育委員会『須崎市キャリア教育通信第5号』(<http://www.kochinet.ed.jp/susaki-l/caritsu005.pdf> 検索日2016年2月4日)
- 中越元子ら 2014 チーム型基盤型学習(TBL)と問題基盤型学習(PBL)を統合した授業「プレゼンテーション」の実践
- 杉田律子 2015 保育科40人規模クラスにおける能動的な学習活動の実践例 平成27年度アクティブ・ラーニングに関する研修会(第一回)資料4

ボランティア活動を通じた学生の育成
「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」実践報告

Training Students through Volunteer Activities
A Report on “Kids Garden in Hyogo University Junior College”

前田 美智代* ・三井 圭子**
黒崎 令子*** ・金谷 公子****
石川 恵美***** ・井上 朋子*****

(平成28年1月20日受理)

要約

本学保育科では、地域との確かな連携を深めるとともに、地域の子育て事情に即した実践力をもつ保育者の育成を目指し、平成26年度より「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」に取り組んでいる。この事業は、保育科の学生の主体的な参加の下、学生と教員で行う子育て支援事業である。平成27年度は、地域の親子対象に計3回の催しを企画し実施した。本稿は、平成27年度の事業内容とその実践の様子を報告するものである。

キーワード：学生の学び、ボランティア、子育て支援

keywords：students' learning, volunteer, child care support

1. はじめに

「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」は、本学保育科の学生と教員で行う子育て支援事業である。この事業が行われることになったのは、従前から兵庫大学が推進する「大学と地域との連絡推進懇談会に関わる事業についての提案」が全学的に示されたことに起因する。

保育科ではこの提案を受けて模索する中で、子育て支援事業の実施に至り、昨年度(平成26年度)から「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」に取り組んできた。この事業は、地域との確かな連携を深めるとともに、地域の子育て事情に即した実践力をもつ保育者の育成を目的としており、学生が主体となって、歌遊び、絵本の読み聞かせ、運動遊び、製作、自由遊び等といった地域の親子が楽しく集える催しを企画し、運営するものであ

る。将来的にはこの事業が「地域子育て支援拠点事業」の一つとして展開されていくことを願っている。

子育て支援事業は近年、全国各地で盛んに行われ、その数も増加傾向にある*¹⁾。また、平成24年に成立した「子ども・子育て関連3法」では、各自治体における地域の子ども・子育て支援事業の充実が謳われた。さらに平成27年から各自治体で始まった「子ども・子育て支援新制度」は、「子ども・子育て関連3法」に基づき、共働きの家庭だけでなく、すべての子育て家庭を支援する仕組みとして制度化された。地域の子育て支援事業に関しては、3つの新規事業が加わり、「地域子育て支援拠点事業」や「利用者支援」等の計13事業が「地域子ども・子育て支援事業」の対象として具体的に示された*²⁾。そして、各自治体の実状に応

(*まえだみちよ 保育科准教授 幼児教育・保育)

(**みついけいこ 保育科講師 幼児教育)

(***くろさきいこ 保育科講師 幼児教育)

(****かなたにきみこ 保育科講師 保育・幼児教育)

(*****いしかわえみ 保育科講師 保育学・幼児教育学)

(*****いのうえともこ 保育科講師 音楽)

じて実施することが求められた。このように近年の動向からも、より一層地域の子育て支援が求められていることが分かる。そこで、本学において地域の子育て支援を行うにあたって、地域の子育て支援事業が推進される背景は理解しておく必要があるだろう。前述した「地域子育て支援拠点事業」は「乳幼児及びその保護者が相互の交流を行う場所を開設し、子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行う事業」として位置づけられているが、まさに本学が目指す子育て支援事業と合致している。そこで、次項では「地域子育て支援拠点事業」に係る資料を参考に、子育て支援事業が活発化される背景を整理しておくこととする*³⁾。

(1) 地域の子育て支援事業が活発化される背景

まず、少子化、核家族化の進行や地域のつながりの希薄化により、子育てが孤立化してきている。その結果、家庭や地域における子育て機能が低下し、また子育て中の親の不安感や負担感が大きくなってしまった。そのような中で児童虐待の問題が深刻化してきたことも否めない。また、仕事をもつ親は子育ての時間の不足に悩み、一方専業主婦は日々の子育ての孤独感に陥っているという現状もある。その他、3歳未満児の約7～8割は、家庭で親が育てているというデータもあるが、子ども自身が多様な大人や子どもと関わる機会が減っているという、子どもの人との交流不足も課題となっている。

そこで、教育、保育施設を利用する子どもの家庭だけでなく、在宅の子育て家庭を含むすべての家庭及び子どもがニーズに合ったサービスを受けられるよう、各自治体に子育て支援の充実が求められた。そして、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安、悩みを相談できる場所を提供する事業として「地域子育て支援拠点事業」が設置されることになったのである。

以上、地域の子育て支援が活発化される背景について述べてきたが、これらを踏まえた上で本学における地域の子育て支援事業を実施する必要があるだろう。本学の学生も、実生活の中で乳幼児

と関わる機会がないまま進学してくる者が少なくはない。しかし、この事業に学生が参画することは、地域に子育て支援の場を提供するだけでなく学生自身の学びの場にもなる。次項では、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」における具体的な活動目的を述べることとする。

(2) 「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」の取り組みに向けて

「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」での具体的な活動目的を次のように設定した。

- ①子どもへの接し方や保護者への対応の仕方を学ぶ。
- ②保育に関する催しの企画力や運営力を身に付ける。
- ③地域の子育て中の親子に交流の場を提供し、交流を促進する。
- ④子育てに関する相談・援助を行い、保護者の孤立感を少しでも解消できる手伝いをする。
- ⑤子育て中の保護者のニーズを知る。

本学保育科では上記の内容を目的として、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」を平成26年度は年間計5回、27年度は年間計3回実施した。次節からは、平成27年度の事業内容と実践の様子を記述していくこととする。

2. 活動内容と課題

(1) 全3回の活動概要

平成27年度は、下記の通り計3回実施した。

- ①2015年5月16日(土)

「運動会を楽しみましょう」

- ②2015年7月4日(土)「七夕のつどい」

- ③2015年11月21日(土)「絵本ミュージカル」

一般参加者については、募集する子どもの年齢を低年齢の1歳から小学校入学前までの乳幼児と設定した。これは、子育て中の保護者がどの時期に不安になったり辛いと感じたりするのかを把握しておく必要があると感じたからである。そして、案内方法として、チラシを作成し、さらにそ

れを関係各所へ配布することによって参加者を募った。今年度は、昨年度の成果もあり、募集後もなく定員に達した。

一方、学生のボランティアスタッフについては、年度当初に保育科全学生に呼びかけ、募集した。そして、参加することになった学生は、各回、企画、計画、実施、反省を行い、次の催しへと繋いでいった。各回の準備期間は約一か月程度であったが、各学年の学生が授業の空き時間、昼休みや放課後に集まり、計画、準備を進めた。

次項では各回の実践内容と課題を記述していくこととする。

(2) 活動の記録

①運動会を楽しみましょう

表1) 運動会を楽しみましょう

催し名	運動会を楽しみましょう
開催日時	2015年5月16日(土) 10時30分～11時30分
開催場所	兵庫大学体育館
参加人数	子ども38名、大人41名(親子30組)
活動内容	・親子体操(ふれあい遊び) ・わんぱくサーキット ・玉入れ ・劇「花まつりのおはなし」 ・お土産コーナー
学生スタッフ	72名

i) 活動内容

まず最初は、子どもと保護者、また子どもと学生がふれ合える遊びとして、子どもたちが保護者や保育者の股の間をくぐったり、足の甲に乗ってバランスを保ったりするといった、身体を動かさず遊び等を行った(写真1)。始めは緊張している子どももいたが次第に笑顔が見られるようになり、心も身体もほぐれていく様子が窺えた。

次に行ったのが「わんぱくサーキット」である。キャタピラ、マット運動、ボール遊び、跳び箱ジャンプ等の中から年齢に合ったサーキットのコースを選んでもらい、それぞれに取り組んでももらった(写真2、3)。興味をもち、何度も挑戦しようと

する子どもの姿が多く見られた。

その後、色別対抗の玉入れを行った(写真4)。子どもの安全を配慮し、玉とかごは全て学生が制作した。また、年齢に応じて、かごの位置や高さを変える等の工夫を加えた。その成果もあり、子



写真1) 親子体操(ふれあい遊び)



写真2) わんぱくサーキット(キャタピラ)



写真3) わんぱくサーキット(フープコーナー)



写真4) 玉入れ

子どもも保護者も必死になって取り組み、会場が一気に盛り上がった。

最後は、学生が大学行事に向けて練習していた「花まつり」の劇を鑑賞してもらい、会を閉じた。

この催しを開催するにあたって学生が事前に書いていた指導案は図1の通りである。

ii) 成果と課題

ここからは、学生アンケートを基に成果と課題を分析する。

まず、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」を楽しみにしていたかとの問いについて、「とてもそう思う・そう思う」との回答が97.2%、終了後「参加してよかったか」との問いには100%の学生が良かったと答えていた。初めての体験であった学生も多く、心待ちにしていたことが窺えた。また、終了後は全員の学生が充実感で一杯になった様子が見えた。

次にその理由を具体的に探っていきたい。

まず、「準備をするにあたり、子ども第一に考えて準備をした」との回答が見られた。子ども第一の準備が具体的にどうするものか一つの事柄において、実際に試してみることで、具体的に成果と課題が見えたことが大きな喜びとなったようだ。体験することの重みだと思われる。

また、「最初は保護者から離れず、全く関わりが持てなかったが、あきらめずに話しかけスキンシップを取り続けた。少しずつ緊張がほぐれ、笑顔が見えるようになって、終了前にはすっかり打

ち解けてくれた。その上別れるのをさみしがるまでになったことが、何よりの喜びだった」との記述も見られた。不安で一杯の子どもたちの気持ちを理解し、その気持ちに寄り添って、時間をかけて関わろうとした学生の努力が見えるようである。幼児とつながりを持つためには、時間をかける必要があることを学べていると理解する。

開催中、色々なアクシデントもあったが、そのことについては「時間通りに進まず、予定していた種目を短時間で終えなくてはならなくなった」、「リハーサルと違った箇所が多くあった」等と記述している。それぞれの場で臨機応変に対応でき、事なきを得たことは何より学生にとっては大きな自信につながったようだ。「変更しながら最終的には時間通りに進めたし子どもたちにも喜んでもらえて良かった」、「保育科みんなの協力があったため変更もあったが、対応でき成功することが出来て良かった」などの記述がアンケートに記載されていたことから窺える。

他には「この日は身体を動かす運動遊びを予定していたが、1対1で関わったので、怪我もなく、ルールも個別に丁寧に伝えられたので夢中で遊ぶことが出来た」との記述もあった。このような運動遊びには危険が伴うこともある上、またルールが徹底されないと楽しく遊べないことも理解できたようだ。

以上は学生の記述に見られた成果だが、一方、戸惑ったことや、その経験から見出した自己課題についての記述も見られた。例えば、「子どもがずっと泣いていて困る事が多く、その時に距離をうまくつかめなかった事が、自分の中ですごく悔しくて、もどかしかったので、次のボランティアまでに、その辺りをしっかり学習しておきたいと思いました。でも、今回ボランティアに参加できて、たくさん子どもと関わることができ、より一層保育士になりたいと思えました。」との記述があった。保護者から全く離れられない子どもの対応に大変困っていた学生であったが、自分で課題をもち、次に繋げようとする前向きな姿勢を読み取ることができる。

また、時間配分をより細かく打ち合わせる必要

があったという感想も多く見られた。その場に応じた臨機応変な行動も重要であるが、打合せを行う中で各内容にかかる時間を実際に動きながら何度もシュミレーションしておく必要があるだろう。

最後に、学生の行動から見られた今後の課題を取り上げる。それは、参加している子ども全員の動きを見渡すという視点がなかったことである。自分の担当の一人の子どもにはしっかりと関わることができていたが、参加している子どもたちがどのように動き、何人の子どもたちが遊びの内容を理解して楽しんでいるのか、また何人の子どもが全体の輪に入れていないのか等を把握しようとする姿勢があまり見られなかった。今後は、学生が一人の子どもと関わりながらも、責任を持って、全体の動きを見渡せるという力量を身に付けていってほしい。

②七夕のつどい

表2) 七夕のつどい

催し名	七夕のつどい
開催日時	2015年7月4日(土) 10時30分～11時30分
開催場所	兵庫大学11号館201教室と芝生広場
参加人数	子ども40名、大人40名(親子30組)
活動内容	1. はじめのことば 2. えほん「たなばたものがたり」スライド映写 3. 楽器を使って演奏しましょう 曲「たなばたさま」 4. お楽しみコーナーをまわしましょう ①シャボン玉遊び ②さかなつり ③バルーンアート 5. おみやげをいただきます
学生スタッフ	48名

i) 活動内容

会場には大きな笹や、野菜で作った生き物などを飾り、子どもたちを迎えた。プログラム前半は、絵本「たなばたものがたり」をスクリーンに投影しながら読み聞かせを行い、その後「たなばたさま」の歌をみんなで歌ったり、カスタネットや鈴



写真5) 楽器演奏



写真6) シャボン玉遊び



写真7) さかなつり

を使って演奏したりした。歌と楽器の音色が会場に響き、和やかな雰囲気になった(写真5)。

プログラムの後半は芝生広場に移動し、シャボン玉遊び(写真6)、さかなつり(写真7)、バルーンアート(写真8)の3つのお楽しみコーナーを



写真8) バルーンアート

順に回ってもらった。シャボン玉遊びは年齢に応じて遊べるよう、ストローだけでなく、うちわやハンガー等も準備した。大きなシャボン玉を作ったり、できたたくさんのシャボン玉を追いかけてみたり等、普段できない体験に歓声が上がっていた。さかなつりコーナーでは試行錯誤しながらも一生懸命に魚を釣ろうとする子どもの姿が印象的だった。そして、バルーンアートコーナーでは、学生が風船の作り方を説明し、風船づくりを体験してもらったが、子どもと保護者が一緒になって楽しそうに作っていた。最後にお土産を渡し、会を終えた。

ii) 成果と課題

成果としては、学生本人が積極的にできたか、そうでなかったかという振り返りができていた。そして、瞬時の判断、決断と動きを考える機会にもなっていた。また、乳幼児の姿を目の当たりにしてようやく、できることできないこと、難しいこと等が分かり、幼児理解の重要性を感じ取った学生も多かったようである。例えば、「どの年齢の子どももシャボン玉を楽しんでくれてよかったです。特に1歳や2歳児でもうちわでつくるシャボン玉は簡単にできてとても嬉しそうにしてくれてよかったです」というようにうちわで作るシャボン玉についての記述が多く見られた。一方で「今回行った3つの遊びは1才児には難しそうだった」、「1才児には難しいなと思った。バルーンアートも作りにくそうだった。だけど、シャボ

ん玉を追いかけて遊ぶのがすごく楽しそうだった」のようにできないことにも気付けた学生もいた。

また、小さな子どもが楽しめる方法を自分たちで生み出し、工夫しようする姿勢も見られた。例えば、魚釣りでは、魚の大きさや釣り竿の長さ等の遊び方の工夫や改善を繰り返し行っていた。

しかし、お楽しみコーナーを効率よく回ってもらう順序までは考えられていなかったようである。「お楽しみコーナーを回る順番で、バルーンアートを先にする、シャボン玉でバルーンアートがぬるぬるになっていたので順番を変えた方が良かったと思いました」というように、参加者が回る順番を改善点として記述している学生が複数見られた。今後は、やってみて気付くのではなく、見通しを立て、子どもたちの心理や行動を予測しながら十分な準備を行うことが課題である。

最後に、日本の伝統文化の一つである七夕まつりであるが、現代社会では、家庭において七夕まつりを楽しむ機会が少なくなっている。しかし、七夕まつりは、子どもたちにとって、日本の伝承文化に親しむ機会となり、また星空、宇宙に興味をもったり、笹飾りの制作を楽しんだり等と様々な意義をもっている。だからこそ、保育者はこの七夕に関する知識を十分に理解した上で、今後も保育現場における7月の行事として大切に扱ってほしいものである。

例えば、願い事を短冊に書く習わしがある。今はサインペン等の便利なものを用いるが、昔はサトイモの葉っぱに溜まった朝露で墨をすり、筆で書いていた。とても厳かかつ神秘的であり、天の星に願い事が本当に届くように思われる。他、短冊を笹の枝に付ける場合、今は粘着テープを使用してしまうが、昔は「こより」を使用して、笹の枝に括り付けていた。このような便利なものがなかった時代のあの素朴さも子どもたちに伝えていくことはできないだろうか。

今回はまず子どもたちに楽しんでもらえる活動内容を学生たちは計画し、実施したが、今後は日本の伝統文化である行事としてさらに価値あるものにするために、上記に述べたような様々な行事

の本来の姿や習わし等も学生自身が学習し、子どもたちに伝えていくことができるよう、教員が助言していく必要もあるだろう。

③絵本ミュージカル

表3) 絵本ミュージカル

催し名	絵本ミュージカル
開催日時	2015年11月21日(土) 10時30分～11時30分
開催場所	兵庫大学体育館2階(リズム室)
参加人数	子ども24名、大人23名(親子20組)
活動内容	○学生による手遊び ・お姉さんと一緒に遊みましょう 「手はどこだ」 ・お家の人と一緒に遊みましょう 「パンダちゃん」 ○絵本ミュージカル 「ひつじパン」「おっばい」「いつもいっしょに」「みんなうんち」「ぴょん」「もりのおふろ」「おおきなかぶ」「たまごのあかちゃん」 ○お土産コーナー
学生スタッフ	11名

i) 活動内容

今回は「NPO法人生涯アカデミー」より専門家を招き、音楽と絵本の読み聞かせによる絵本ミュージカルを楽しんだ。まず、絵本ミュージカルが始まる前の導入として、一人のできる手遊び、さらにそれを親子や学生と子どもといったペアのできる遊びへと展開し、取り組んだ(写真9)。また、強弱や速さに変化を付けながら行うなど音楽的な要素も含まれ、先に続く絵本ミュージカルの導入としてふさわしい内容になっていたと思われる。

講師による絵本ミュージカルを鑑賞している間は、親子の側と一緒に、専門家による多彩な表現やパフォーマンスを楽しみながら、どんな絵本が子どもの心を引きつけるのか、どんな音楽が心に届くのか等、それぞれの子どもたちの表情を見たり、ことば、声等に耳を傾けながら関わった(写真10、11)。

また、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学



写真9) 手遊び



写真10) 絵本ミュージカル「みんなうんち」



写真11) 絵本ミュージカル「いつもいっしょ」

部」は今回が今年度最後ということもあり、お土産を何にするかという点で考え、記念に残る物にしようということで、それぞれの年齢にあったパズルを制作することになった(写真12)。まず、絵を考えることから始め、木に原画を描き、色塗り



写真12) お土産のパズル

まですべて学生が行い、出来上がったパズルを見て完成度の高さが自信にもつながったようである。

ii) 成果と課題

今回のアンケートの「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」を楽しみにしていたかの問いについて、「とてもそう思う・そう思う」との回答が100%、終了後、保育現場での保育の仕事を想像できたかの問いに対して、「とてもそう思う・そう思う」が90.9%の学生が答えている。その理由を探っていききたい。

自由記述を見ていると、子どもとの関わりや手遊びの実践についての記述よりも、今回は、専門家による絵本ミュージカルの鑑賞ということで、ボランティアをしながら、自分自身がとても勉強になったという記述が非常に多く見られた。具体的な内容としては、「今後保育士になった時が想像できる内容でした。絵本をただ読むだけでなく、楽器を使ったり歌いながらの読み聞かせはとても楽しかったです」、「ピアノや楽器を使って絵本を読むと、想像力が広がるように思いました」や「絵本ミュージカルは絵本のストーリーにそって、ピアノや楽器などで音楽が展開されていき、子どもも大人も楽しめた。保育の現場でぜひ活かしていきたい」というような記述が多く記載されていた。

以上が学生の記述からみた成果だが、課題としては、当日の流れが理解できていないために、ど

こでどのように子どもと関わっていけばいいのか、保護者から離れて絵本に近づいていく子どもにどのように声をかければいいのか、子どもが落ちついて見られるためにどうしたら良かったのか等の反省があった。

講師の専門家がしてくれるからではなく、いろいろな子どもの姿を想定して臨むことも必要であると感じる。

その他、当日は加古川附属幼稚園や他の幼稚園・保育所などの行事と重なり、その行事のボランティアに参加する学生、また1年生が実習と重なっていることもあり、ボランティアの人数がとても少なかった。当日にキャンセルの学生もあり、準備がぎりぎりになってしまった。当日までの準備なども含めてある程度の人数は必要であり、日程についても今後の課題でもある。

次節では、学生のアンケート結果を基に学生の活動への成果と課題を振り返り、保育科の学生としてどのような学びになったのかを考察する。

3. 考察

本節では全3回の学生アンケートを比較しながら、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」での学生の学びについて考察することとする。

まず、問1のこの催しを楽しみにしていたかどうかという問いに対する回答は表4の通りである。どの回も、参加学生の9割以上がこの催しを期待していたことが分かる。ただ3回目の「①とてもそう思う」は1、2回目と比べて、回答率が低い。これは、1、2回目のプログラムは1時間分全てを学生が企画し進行したことに対して、3回目は専門家による公演が主であったことも関係しているかもしれない。準備に時間がかかる等の苦勞が多くても、学生自身が催し全体を企画、運営した方が学生の期待値も高くなると読み取ることができるだろう。ボランティアをしながら専門家の公演を鑑賞できる機会も、将来保育者になる学生にとって意義のあることであるが、次年度以降、検討していきたい点である。

表4)「問1 キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部を楽しみにしていた。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	48.6%	43.8%	9.1%
②そう思う	48.6%	47.9%	90.9%
③どちらでもない	2.8%	8.3%	0.0%
④そう思わない	0.0%	0.0%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

次に、問2のこの催しに参加して良かったかという問いに関しては、表5の通りとなった。どの回もほぼ100%の学生が満足していることが分かる。2回目に「どちらでもない」と答えた学生の中には、「今回は子どもたちを連れて遊ぶのではなかったのでどうしたらいいか分からず積極的に取り組めなかった」との記述があった。やはり、子どもとの直接的な関わりをもつことができなければ参加したことの価値が見出しにくいかもしれない。子どもの人数の関係上、難しいこともあるが、全ての学生が子どもと深くかかわれるような配慮が必要であるだろう。

そして、問3の準備が万全であったかという問いに対しては、1回目、2回目はもう少し入念な準備ができたのではないかと感じている学生が多いことが分かる(表6)。前述したようにこの2回は催し全てを学生が企画、運営、進行したのであるが、今後は十分な準備期間をもち、学生が自信をもって子どもたちを迎えられるように指導していきたい。

表5)「問2 キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部に参加してよかった。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	76.4%	62.5%	54.5%
②そう思う	23.6%	31.3%	45.5%
③どちらでもない	0.0%	6.3%	0.0%
④そう思わない	0.0%	0.0%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

表6)「問3 準備は万全でしたか？」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	13.9%	8.3%	54.5%
②そう思う	65.3%	58.3%	45.5%
③どちらでもない	16.7%	22.9%	0.0%
④そう思わない	4.2%	10.4%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

問4の保育現場での保育の仕事を想像できたかという問いに対する回答は表7の通りである。学生の大半が学生自身の中でこのボランティアでの経験が保育現場での仕事に生かせると感じていることが分かる。ただ、「とてもそう思う」と答えた学生は2割に満たない。今年度の振り返り方法は、アンケートのみに留まっていたが、今後は、どのような力が身につく、この経験が保育現場でどのように役立つのか等を、学生同士で共有する時間が必要なのではないか。そうすることによってさらに学生の意識を高めることができるのではないと思われる。

表7)「問4 保育現場での保育の仕事を想像できた。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	15.3%	18.8%	18.2%
②そう思う	76.4%	45.8%	72.7%
③どちらでもない	8.3%	33.3%	9.1%
④そう思わない	0.0%	2.1%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

問5の保育者になりたいと思ったかという問いの回答は表8の通りである。この問いも問1と同様に、主体的な取り組みが多い方が、保育者への憧れも強くなると読み取れるだろう。

表8)「問5 保育者になりたいと思った。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (総本)
①とてもそう思う	62.5%	56.3%	36.4%
②そう思う	30.6%	35.4%	54.5%
③どちらでもない	6.9%	8.3%	9.1%
④そう思わない	0.0%	0.0%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

問6はこの経験を通して今後自分に必要だと思ったことは何かという問いであった(3つまで回答可)。結果は図2の通りである。

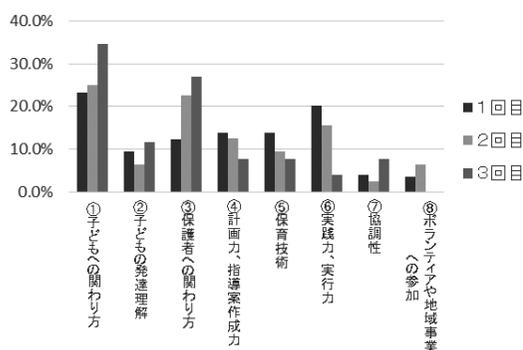


図2)「問6 キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部を経験して今後自分にとって必要だと思ったことは何ですか? (3つまで回答可)」

このボランティア経験を通して、各回ともに、「①子どもへの関わり方」、「③保護者への関わり方」を今後学んでいく必要があると捉えている学生が多いことが分かる。さらに、「④計画力、指導案作成力」、「⑤保育技術」、「⑥実践力、実行力」を選択した学生の割合が、各回が進むにつれて減少しているのに対して、「①子どもへの関わり方」、「③保護者への関わり方」を選択しているが学生の割合が増加していることは明白である。これは、計画力や実践力以上に、実際に経験していく中で、子どもや保護者とのかかわりの重要性に気付いた結果であろう。例えば、前章に取り上げた、保護者から全く離れられない子どもの対応に困り、次回までにはしっかりと学習しておきたいと述べていた学生は、2回目の感想では次のように記述している。「今回2回目の参加でした。前回

はよく泣く子が担当で、上手に接することができず、今回、不安な気持ちがあったのですが、全体を見て多くの子どもと笑顔で接する事ができたのが良かった点です。1人で遊んでいる子に、近づいて、一緒に遊んだり、いろんな子と関わる事ができました。そして、前回の担当だったY君もいましたが、自分からおもいきって接してみると、上手に接することができて、克服できたので良かったです」。前回の自分の行動をよく振り返り、今回は目標をもって積極的に子どもと関わった結果、達成感をも味わえた様子が窺える。この学生は1回目も2回目も「①子どもへの関わり方」を選択しているが、1回目は自分の力量不足から選ばれた回答であるのに対して、2回目は克服できたけれどもっと身に付けておきたいと思い、選択したのではないだろうか。今後、項目内での学生の意識変化も分かるよう、アンケート内容を工夫する必要があると思われる。

他にも、前回の自分の行動と比べて、次の自分への課題を見出している学生が複数見られた。その一例を取り挙げる。「多くの子とたくさん関わられて、とても楽しかったです。保護者とも積極的に話せたり、1回目の時より子どもに対して、言葉がけが多くできたので良かったです。今回で改めて保育者になりたいと思いました。合奏の際、鈴を持ってない1歳半の子どもがいました。代わりに私が鳴らしたけれど、鈴に触れる機会が少なかったので、発達年齢をしっかりと理解して、道具の使える・使えないでどうすれば良いかを、これから考えていくようにしようと思います。もっと子どもに上手に関わる方法、発達年齢をしっかりと学ばないといけないと思いました」。この学生は、1回目のアンケートでは、問6に対して「①④⑤」を回答していたが、2回目では「①②⑤」へと変化していることから、「②子どもの発達」について学ぶ必要があると実感していることが分かる。

実際に学生の様子を見ていても、子ども一人一人への対応や声のかけ方において回数を重ねるごとに笑顔で対応できるようになり、共に活動を楽しめるまでに成長できていたように感じる。連続

的にボランティア活動に参加することによって少しずつ学生に自信が付き始めているように窺えた。

そして、保護者との関わりについてであるが、保護者の方々は、温かいまなざしで学生に挨拶をしてくれたり、「ありがとう」と感謝の気持ちを表してくれたりしていた。そのような保護者の温かさが学生にも伝えわっていたようで、自由記述項目の中にも「保護者の方ともたくさんいろんな話をできてよかった」等といった保護者と関わったことについての記述も数多く見られた。一方で、「保護者との関わりが難しかったです」と記述している学生もいることから、自分より年上の人たちへの接し方にまだまだ苦手意識をもつ学生も少なくないことも分かった。他、「保護者の方と子どもとの関係を見ることができてとても良かったです」と書いている学生も見られた。実習先では保護者と関わる機会が少ないだけでなく、親子が一緒にふれあっている場面を目にする機会もあまりない。この短大での地域子育て事業は、学生にとっては、子どもあるいは保護者と関わる機会を増やすだけでなく、親子の関係性を学ぶ貴重な機会となることも分かった。

問7のこの経験を通して、地域の子育て支援に貢献できたと思うかという問いに対する回答は表9の通りであった。

表9)「問7 キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部を経験して地域の子育て支援に貢献できたと思いますか。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	31.9%	31.3%	18.2%
②そう思う	55.6%	52.1%	81.8%
③どちらでもない	12.5%	14.6%	0.0%
④そう思わない	0.0%	2.1%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

各回8割以上の学生が、地域に貢献できたと感じていることが分かる。恐らく、地域の親子に楽しく遊べる場を提供することができたという観点から選択しているのであろうが、一方で一瞬では

あるが保護者がほっとした顔で我が子の姿を見て目を細める姿も垣間見ることができた。学生の感想の中には「笑顔の子どもを見て、保護者も笑顔になっていた」という記述も見られたが、保護者の方にこのような時間を提供していること自体が、地域の子育て支援の一助になっていることを学生にも感じ取ってもらえていることを期待したい。

最後に、問8のまた機会があれば参加したいかという問いに対する回答は表10のようになった。

表10)「問8 また機会があれば参加したい。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	54.2%	47.9%	36.4%
②そう思う	37.5%	47.9%	63.6%
③どちらでもない	8.3%	4.2%	0.0%
④そう思わない	0.0%	0.0%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

この回答からも分かるように、この事業は学生にとって意義のある経験となり、さらに9割以上の学生がこのようなボランティアに参加することを望んでいることが分かった。次年度以降も、時期、回数、人数、運営方法を再検討した上で実施していきたい。

本節では、学生のアンケート結果を基に、ボランティア活動を通して得られた学生の成果と課題について考察してきた。参加した学生は、「子どもとかわりたい」、「子どもを理解したい」という目的を持ち、実際に子どもと触れ合うことで、将来の自分の保育者像を想像したり、準備の重要性や子どもへの言葉がけについての課題を見つけることができていた。今後、学生にはさらに子どもの遊びをより多く知り、またそれらの遊びを各年齢に応じた内容と方法へと十分に展開できる力を身に付けておく必要があるだろう。そして、子どもの喜び、興味や意欲の向上へと繋げるための工夫、一方で安全への配慮もできるようになってほしい。さらには、経験を重ねる中で、コミュニケーション力を高め、保育者が一方的に活動を進めるのではなく、子どもと共に遊びを考え、より子ども

もに寄り添った内容でかつ発展性のある活動を作り上げることができる力量も保育者として備えていってほしいと思う。

次節では、冒頭で掲げた「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」の活動目的に対して得られた成果をまとめ、今後の展望について述べることにする。

4. おわりに

「1. はじめに」で「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」における5つの活動目的を示したが、この目的に対する成果について整理する。

「①子どもへの接し方や保護者への対応の仕方を学ぶ」に関しては、前節で述べたアンケート結果からも分かったように子どもや保護者との関わりについて多くの学びを習得できていた。子どもとの関わりの中では、1時間という限られた時間の中、あるいは回数を重ねる中で、初対面の子どもの接触に苦悩した学生が自分なりに創意工夫して子どもとの距離を縮めていく等の学生の様々な成長が見られたことから大きな成果があったと言える。

「②保育に関する催しの企画力、運営力を身に付ける」に関しては、実習未経験の学生も多い中で、先輩の学生がリーダーシップを発揮し、多彩な遊びを準備、実践できたことに大きな意義があったと思われる。その中で、当日までに何度も打ち合わせを重ね、様々な場面をシミュレーションする等といった入念な準備の重要性や、予想される子どもの姿を話し合い、子どもへの言葉かけや保育者の援助内容を具体化しておくことの必要性にも気付くことができていた。次年度へと生かしてほしい。

「③地域の子育て中の親子に交流の場を提供し、交流を促進する」については、前節で述べたように、学生自身が地域の子育て支援に貢献できたことと実感できていたこと、また親子が楽しくふれあう様子を多く観察することができたことから一定の成果を得ることができたと思われる。今後は、さらに地域の親子同士が交流しやすいような環境づくりにも力を入れていきたい。

「④子育てに関する相談・援助を行い、保護者の孤立感を少しでも解消できる手伝いをする。」についてであるが、保護者のアンケートにおいて、子ども一人ひとりに学生が一人ずつ終始付いてくれて大変助かった、良かったという声が大変多く見られた。中には、「子どもが本当楽しそうで、私も笑って写真をとる余裕が持てました。ありがとう」というような感想もあり、参加した保護者の声からも成果があったと言える。これらの感想からは、子育て中の保護者は、子どもを少しの間でも誰かに遊んでもらえたり、少し距離を置いて子どもを見ることができると望んでいることも分かった。今後は、今年度十分に行えなかった「子育てに関する相談、援助」の部分を加えながら、保護者が子どもを安心して学生に預けられる時間を少しでも多く取り入れたいと思われる。

「⑤子育て中の保護者のニーズを知る」については、アンケートから保護者が求めている催しの内容を知ることができた。ダンス、音楽、造形、体力づくりといった内容を希望している保護者が多いことが分かった。来年度の内容を企画する際に生かしていきたい。

ここまで、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」の活動目的に対する成果についてまとめてきたが、参加した地域の親子からも大変好評で、「来年度も楽しみにしています」との声が多く寄せられており、地域の子育て支援の一助になっていると実感できた。

今後の展望としては、「地域子育て支援の拠点」として、さらにどのようなことができるのかを探求することが課題である。子育て中の親の願いやニーズを的確に把握し、細やかな支援活動ができるよう研究していきたい。そして、事業を行うことによって親のニーズにどれくらい応えることができたのかといった点も具体的に明らかにしていきたい。

さらに、これまでの「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」は、教員が、活動日等を決定し、ボランティアを募って実践してきたが、今後は現在までの経験を踏まえ、学生が主体となって企画・立案・運営を行い、さらに充実感・達成感を

体得してほしいと願う。保育の計画を立て、PDCA サイクルを意識し、実践を重ねていくことが、保育技術の向上や、自身の保育観の確立に繋がるであろう。また、前年度にこのボランティア活動や実習等を経験した先輩がその経験を生かして後輩を指導する、あるいは後輩は先輩の姿を見て学ぶといった、学年を越えた交流がさらに活発化していくことを期待したい。実際に親子と触れ合うことで、保育者の仕事を身近に感じたとの感想も多く見られたが、今後ボランティア経験を通じて学生の士気を高め、本学保育科の目指す「質の高い保育者」を育成する機会にしていきたい。

<脚注>

- * 1) 厚生労働省が公表している平成21年度と平成26年度の「地域子育て支援拠点事業実施状況」を比較すると、地域子育て支援拠点事業実施箇所数が5199か所から6538か所へと1300か所以上も増加していることが分かる。

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/index.html

(2015年12月10日アクセス)

- * 2) 「子ども・子育て新制度」の中で具体化された13事業は次の通りである。

①利用者支援事業、②地域子育て支援拠点事業、③妊婦健康診査、④乳児家庭全戸訪問事業、⑤養育支援訪問事業、⑥子育て短期支援事業、⑦子育て援助活動支援事業、⑧一時預かり事業、⑨延長保育事業、⑩病児保育事業、⑪放課後児童クラブ、⑫実費徴収に係る補足給付を行う事業、⑬多様な事業者の参入促進・能力事業

内閣府・子ども子育て本部「すくすくジャパン！子ども・子育て新制度について」(平成27年10月発行)「Ⅶ. 地域子ども子育て支援事業」より

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/setsumei.pdf>

(2015年12月27日アクセス)

- * 3) ①同書「すくすくジャパン！子ども・子育て

て新制度について」 「Ⅶ. 地域子ども子育て支援事業」中の「地域子育て支援拠点事業」

②厚生労働省「地域子育て支援拠点事業実施要綱」(平成27年5月21日1次改正)

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000103063.pdf> (2015年12月10日アクセス)

①と②を参考に整理した。

CONTENTS

Original Papers

The Present Condition and Consideration of Infant Education in Sri Lanka
..... Keiko Mitsui 1

The Development of Infants and the Usage of Playthings in
Kindergartens and Nursery School
..... Kazumi Miyagawa, Mamiko Inoue 11
Yasunobu Tokuda

The Practical Report on Active Learning at 40 Students-sized Class
..... Ritsuko Sugita 17

Practice Report

Training Students through Volunteer Activities
A Report on "Kids Garden in Hyogo University Junior College"
..... Michiyo Maeda, Keiko Mitsui 27
Reiko Kurosaki, Kimiko Kanatani
Emi Ishikawa, Tomoko Inoue

「研究集録」編集委員会

人文科学 井上 朋子 杉田 律子

社会科学 笹田 哲男 黒澤 祐介

自然科学 宮川 和三 佐竹 邦子

平成28年3月31日印刷

平成28年3月31日発行

(非売品)

兵庫大学短期大学部 **研究集録** 第50号

装訂デザイン 上原 正和

編集・兵庫大学短期大学部研究集録編集委員会

編集委員長 杉田 律子

発行・兵庫県加古川市平岡町新在家2301

兵庫大学短期大学部

TEL (079) 424-0052(代)

〒675-0195

印刷・株式会社ティー・エム・ピー